

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ

平成 3 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ

平成 3 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、匹見町内における埋蔵文化財詳細分布調査第4年次の調査報告書となりました。

木町の埋蔵文化財も調査の進展とともに宝庫と言われた域を越えて、思わぬ、と言った貴重な出土品の発見等もあり、今更その歴史の神秘におどろきを感じるばかりです。

本年度調査分は5地点であったが、いずれも周知の遺跡と言うこともあり慎重に、圃場整備事業との関連で迅速に現地調査に対応した。匹見町大字匹見、半田地区で垣添地点—2m×2mを4ヵ所、太鼓胴地点—2m×2mを4ヵ所、筆田地点—2m×2mを4ヵ所、イセ地点—2m×2mを4ヵ所、ヨレ地点—2m×2mを6ヵ所の5地点であり、それぞれ貴重な遺物の発掘を見ることが出来た。

出土した遺物の概要を見ると、垣添地点については、西端に偏在して縄文晚期の遺物が數十点出土。太鼓胴地点については、縄文晚期の遺物が数百点にのぼり出土している。筆田地点については、古墳後期の遺物と縄文晚期の遺物が混在して出土。イセ地点については、弥生中期～縄文後期前半のものが重層して出土、特に刻日突蒂文等の出土は縄文晚期から弥生前期の過渡期の様相を把握するものとして、極めて貴重なものとされている。また、ヨレ地点については、縄文後晚期のものが数百点出土、下層から一点ではあったが、縄文後期初めに比定されている滑石混入器が出土している。

過去3年間に渡る分布調査、本格調査実施において、それぞれの成果を見たことは、御指導を頂いた島根県教育庁文化課関係各位、島根大学法文学部各位、その他関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、御同慶にたえません。

匹見町内における埋蔵文化財発掘調査も一連の県営圃場整備事業の進展とともに終りに近づきつつあります。第5年次または第6年次の調査結果を待って、発掘された遺物の整理と併せ今後の方向づけを検討することになると考えますが、平成3年度の第5年次調査に先がけて実施する、上記5地点の本格調査が本町で実施している発掘調査の集大成ともなるのではなかろうか、いづれにしても今一息のところまできました。調査閑

係者の協力により全てが完了出来ますよう、重ねてお願ひ申し上げますとともに、本調査に終始御協力いただきました関係各位と発掘作業に従事いただきました作業員の方々に深く感謝の意を表しまして、発刊のことばといたします。

平成3年3月

四見町教育委員会

教育長 平 谷 勉

例　　言

1. 本書は、平成2年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根大学法文学部教授	田中義昭
	島根県教育委員会文化課文化財保護主事	内田律雄
事務局	匹見町教育委員会教育長	半谷勉
	匹見町教育委員会次長	渡辺隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	佐々木厚造
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	柳田悦子 大谷文子 藤村妙子	
調査参加者	栗田定 森清 原田領二 森脇雅夫 沼田吉雄	
	落田政人 渡辺照 山崎リマヨ 長谷川時子 溝田久子	
	斎藤君子 柳田悦子 大谷文子 藤村妙子	

3. 発掘調査に際しては、上地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 調査地の呼称については、地点の小字名を引用とし、また遺物・遺構の有無にかかわらず「遺跡」という文語は用いずに、全て「調査地点」という接尾語を附して称することにした。

5. 紙数に伴って、図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は、渡辺友千代・柳田悦子・大谷文子・藤村妙子が各分担し、執筆・編集は調査員渡辺が、松本岩雄・内田律雄の指導のもとで行った。



調査位置

目 次

第1章 地理的立地と歴史環境	(渡辺友千代)	1
第2章 垣添調査地点	(渡辺友千代)	5
1. はじめに	5
2. 調査の概要	5
3. 各調査区の概要	5
4. 出土遺物	8
第3章 太鼓洞調査地点	(渡辺友千代)	11
1. はじめに	11
2. 調査の概要	11
3. 各調査区の概要	11
4. 出土遺物	13
第4章 筆田調査地点	(渡辺友千代)	17
1. はじめに	17
2. 調査の概要	17
3. 各調査区の概要	17
4. 出土遺物	19
第5章 イセ調査地点	(渡辺友千代)	21
1. はじめに	21
2. 調査の概要	21
3. 各調査区の概要	21
4. 出土遺物	27
第6章 ヨレ調査地点	(渡辺友千代)	37
1. はじめに	37
2. 調査の概要	37
3. 各調査区の概要	37
4. 出土遺物	40

挿図目次

第1図 分布調査地とおもな遺跡の位置	3 ~ 4
1. 発掘地点鳥瞰	
第2図 坟添地点配置図	6
第3図 坟添地点土層断面図	7
第4図 坟添地点遺物実測図	8
第5図 太鼓胴地点配置図	10
第6図 太鼓胴地点土層断面図	12
第7図 太鼓胴地点遺物実測図(1)	14
第8図 太鼓胴地点遺物実測図(2)	15
第9図 筆田地点配置図	16
第10図 筆田地点土層断面図	18
第11図 筆田地点遺物実測図(1)	19
1. 上 鍋 器	
2. 横 瓶	
第12図 筆田地点遺物実測図(2)	21
第13図 筆田地点遺物実測図(3)	22
第14図 イセ地点配置図	23
第15図 イセ地点土層断面図	25
第16図 イセ地点遺物実測図(1)	27
第17図 イセ地点遺物実測図(2)	30
第18図 イセ地点遺物実測図(3)	31
第19図 イセ地点遺物実測図(4)	32
第20図 イセ地点遺物実測図(5)	33
第21図 イセ地点遺物実測図(6)	34
第22図 イセ地点遺物実測図(7)	35
第23図 ヨレ地点配置図	36
第24図 ヨレ地点土層断面図	38

第25図 ヨレ地点遺物実測図(1)	41
第26図 ヨレ地点遺物実測図(2)	42

図 版 目 次

図版1 垣添地点遠景(北から)	垣添地点B区(北壁)
図版2 垣添地点D区(北壁)	垣添地点出土遺物
図版3 太鼓洞地点A区(北壁)	太鼓洞地点C区(北壁)
図版4 太鼓洞地点出土遺物(1)	太鼓洞地点出土遺物(2)
図版5 筆田地点B区(東壁)	筆田地点D区(北壁)
図版6 筆田地点出土遺物(1)	筆田地点出土遺物(2)
図版7 イセ地点B区(北壁)	イセ地点C区(北壁)
図版8 イセ地点D区(北壁)	イセ地点出土遺物(1)
図版9 イセ地点出土遺物(2)	イセ地点出土遺物(3)
図版10 イセ地点出土遺物(4)	イセ地点出土遺物(5)
図版11 イセ地点出土遺物(6)	イセ地点出土遺物(7)
図版12 イセ地点出土遺物(8)	イセ地点出土遺物(9)
図版13 ヨレ地点B区(北壁)	ヨレ地点F区(北壁)
図版14 ヨレ地点出土遺物(1)	ヨレ地点出土遺物(2)

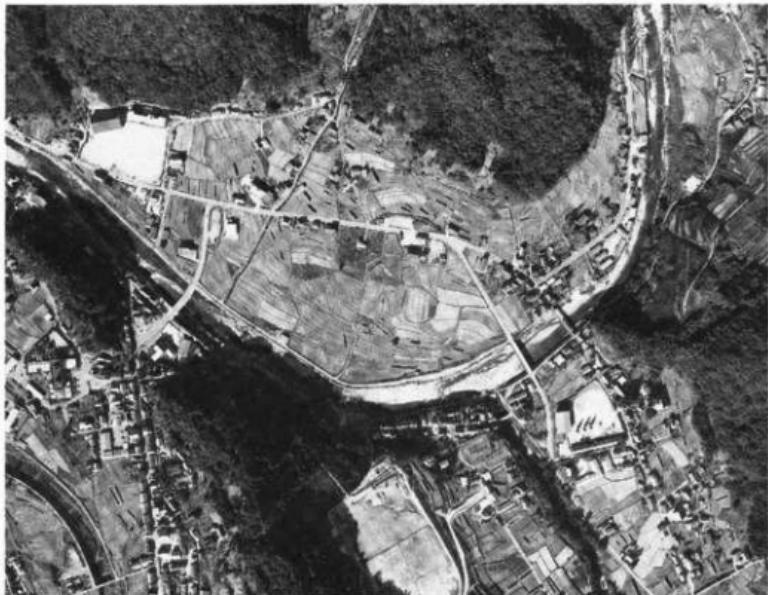
第1章 地理的立地と歴史環境

本報告する「匹見町内遺跡詳細分布調査報告書」の調査地は、鳥根県美濃郡匹見町大字匹見字半田に所在する。

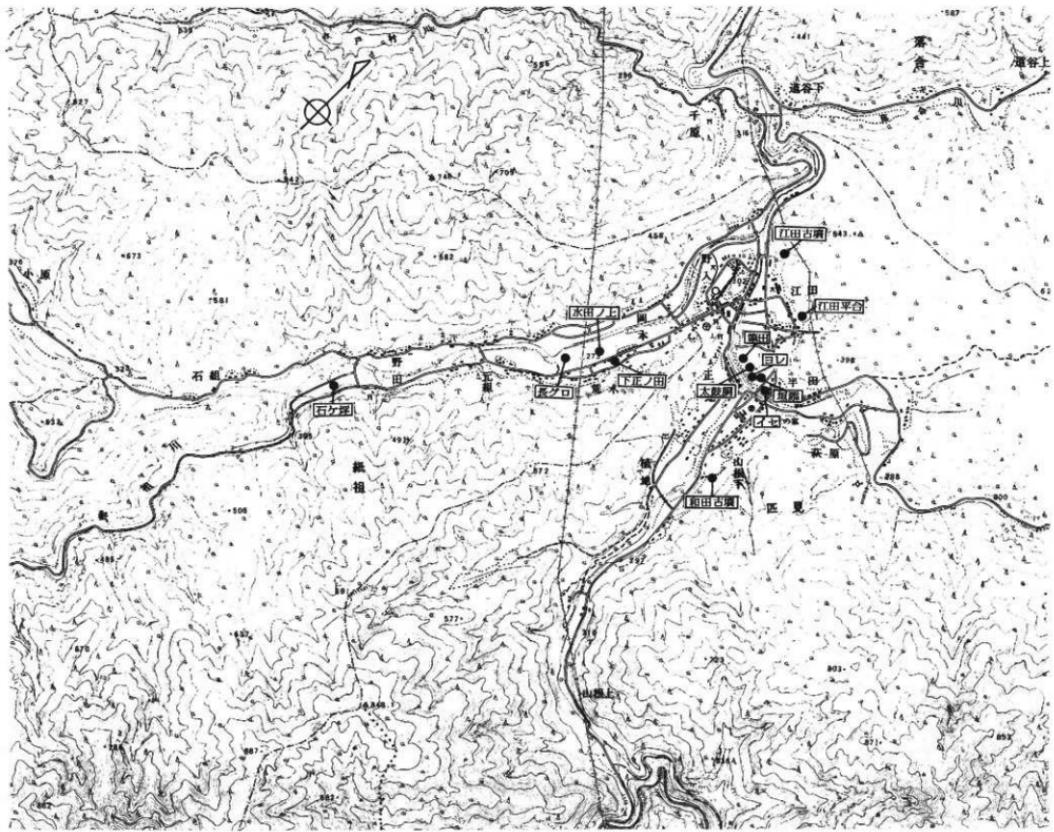
本地域は、中国背梁山地に源を発して、南西流した匹見川が、北西に変流する位置にあって、また一方、北流した支流広見川とが相会する合流地であるため、小規模ながら沖積地が形成されている。その沖積地は周流する匹見川に沿って下流域に延び、一つの谷平地をつくり、一体は水田地として利用されている（写真1）。

そうした地形立地にある本地区の周辺には原始・古代遺跡も多い。例えば、今調査地の隣接には門田遺跡（縄文後期）、辰美屋遺跡（縄文・弥生・古墳）があり、指呼の山裾には須恵器・土師器が出土した八祖遺跡・木ワダ畠遺跡などが点在している。また、沖積地の北西面の丘陵地には弥生後期の江田平台遺跡（第1図）、裾斜地には江田古墳（第1図）も存在している。

（渡辺 友千代）



1. 発掘地点鳥瞰



第1図 分布調査地とおもな遺跡の位置

第2章 垣添調査地点

1.はじめに

垣添調査地点は、匹見町大字匹見（イ278-1）字半山に所在する。本地点の北西面200mには500m内外の山が連なり、その山裾はなだらかに派生し、南面150mには匹見川が広見川を相会して、北西流するという河岸段丘に立地する。また、地点を中心と北西—南東方向は、匹見川に沿って、比高約4m測る河岸段丘が延びていて、水田地として利用されている（第2図、図版1-1）。

地点の現地標高は、高位で265.13m、低位で264.53mを測り、比較的平坦面を成している。

調査は、10月11日から18日までのうち4日間、32人役を費やして、16m²を行った。

2. 調査の概要

調査地点は、北西・南東に細長い長方形を成した約400m²を測る水田地。

調査は、まずA区と称する2m×2mの方形区を南東側の北面に任意に磁北に設定した。そしてB区と称する調査区は、A区から西へ20m地点に設定し、さらにC区は磁北に向って、B区から16mを測る地点に設定。D区と称する調査区は、C区から西に15mを測る地点に設定し、全体を把握するように努めた。

3. 各調査区の概要

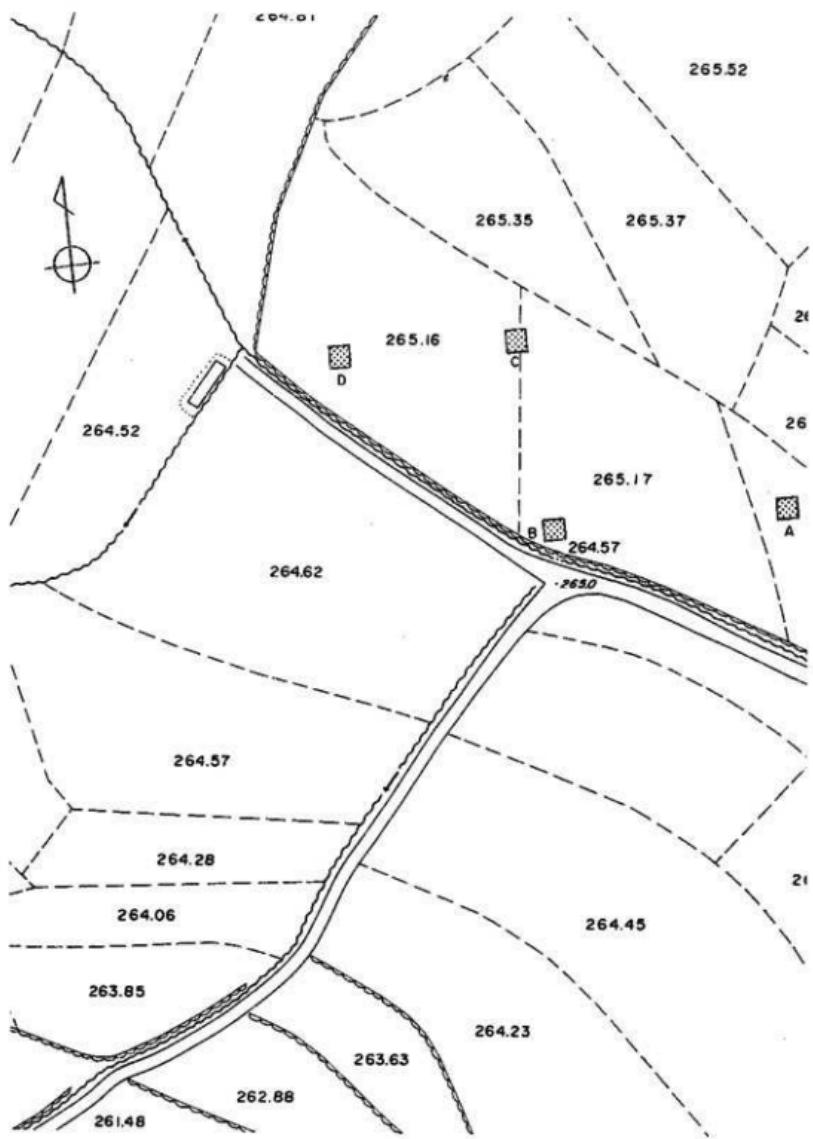
A区（第3図） 現地表面標高は約265.23mを測る。

表土の1層は黒灰色を呈した耕作土で、層厚は約14~16cmを測り、ほぼ水平に堆積する。2層の客土は灰色砂質土で、2~3cm大の石粒を含み、層厚は4~6cmを測り、ほぼ水平である。3層は、砂質性の暗褐色で、10~20cm大の円礫を多く含む。層厚は30~38cmを測り、上面はほぼ水平に堆積するが、下面の西壁側はやや乱曲するものの遺物は検出されず、文化層とは捉え難い。4層は人頭大の石塊や砂礫で形成された河床礫層である。

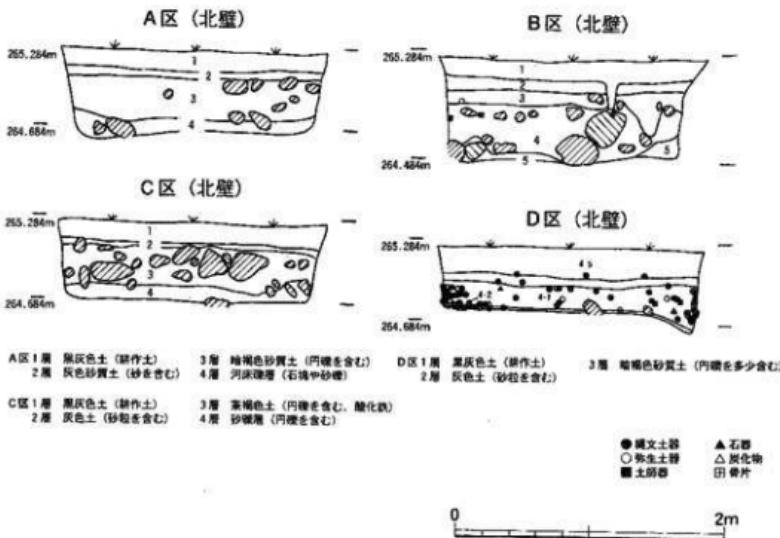
出土物は、1・2層に須恵器・石器剝片各1点ずつ検出された以外、他の層には確認されなかった。

B区（第3図、図版1-2） 調査対象地のほぼ中央の南端に設定した調査区で、現地表面標高は約265.2mを測る。

1層は黒灰色土の耕作土で、層厚は14~18cmを測る。2層は酸化鉄が浸透し、茶灰色を呈し、層厚は7~10cmを測るが、上面は砂粒を含み下面はやや黒味帯びる。したがって上面約6cmの層厚は、



第2図 堤添地点配置図



第3図 塙添地点土層断面図

客土と想定される。出土物としては、土師器を中心地に細片が数十点確認された。3層は、黒色土層。北壁を見る限り、層厚は8~10cm測るが、南壁側には本層の黒色土は認められないので、造田等でカットされたものであろうか。また、北東面に認られた20cm余りの陥入部分は、遺構として捉られるだけの根拠は乏しかった。本層から土師器2点、弥生土器1点、繩文土器1点が検出された。4層は、円礫・砂礫を含んだ暗褐色砂質土。層厚は約40cm余りを測り、深層である。上面は黒色が強いが、下面に向って漸移に灰色帯びる。出土物はない。5層は円礫を含んだ黄褐色砂礫層で、実質的には河床疊層。

C区（第3図） C区の現地表面標高は約265.16mを測る。

1層は、黒灰色した水田耕作土。2層は、1cm大の礫を含んだ灰色土で、層厚は3~5cmを測る。3層は、10~30cm大の円礫が多く含み、酸化鉄が沈着しているため茶褐色を呈する。層厚は30~36cmあり、下面是砂礫を多く含む。4層は、円礫を多く含んだ砂礫層で、いずれの層位とも出土物はなかった。

D区（第3図、図版2-1） 西端の調査区で、現地表面標高約265.2mを測る。

1層は、約20cmを測る黒灰色した耕作土。2層は、砂粒を含んだ灰色土の客土で、4~6cmあり、ほぼ水平に堆積する。本層からは土師器・石器剝片・縄文晩期と想定される遺物が數十点出土した。

3層は、砂質性の暗褐色土層・層厚は20~30cmを測り、全体適に北東面に向って傾斜する。下面に20~30cm大の円錐による集群がみられたが、その下方に人工的土坑は確認されず、また遺物も疎間的であったため、遺構とは言い難い。

本層からは、土師器・弥生土器・縄文土器・剣片石器・骨片など數十点が出土した。

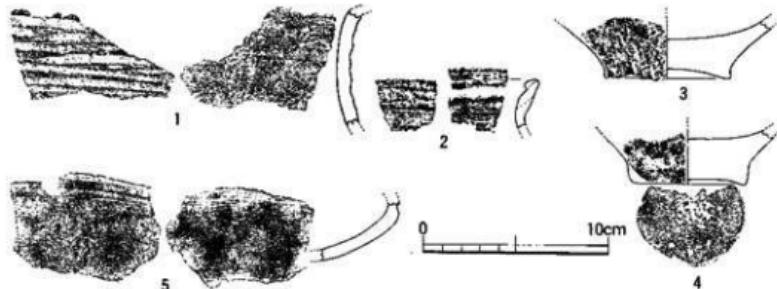
4. 出 土 遺 物

はじめに 本地点からは100点余りの遺物が出土している。北東側のA区では、耕作土中から須恵器1点、石器剣片1点。またB区では1・2層から土師器などが4点と、3層から縄文土器・弥生土器が各1点、2点の土師器が出土した。特に南西側のD区では、1・2層から數十点、3層からは縄文土器76点、弥生土器11点、土師器6点、石器剣片4点、骨片2点、打製石斧1点、炭化物1点が出土している。しかしC区では皆無であり、総体的に北東側は僅少で、南西側に集中度合がみられる。多出した縄文土器片は後期に位置付けられるものであった。

出土遺物（第4図、図版2-2）

1は、D区3層に出土したもので、粗製の頸部。口縁は外反し、外面は凹線文状にみえる粗い条痕文を施し、内面はナデ。色調は内外とも暗褐色を呈する。2は、半精製の口縁部。頸部からの立ち上がりは大きく開き、口縁部は内面側に円弧状帶を成す。内外とも条痕調整の後ナデを施す。色調は内外とも暗褐色を呈す。3・4は底部。そのうち3は、外面を条痕で調整するが、内面はナデを施す。4は高台外面を箆磨きし、いずれも凸レンズ状を成し、暗褐色を呈す。5は、精緻に箆磨きされた精製土器の肩部。肩部の屈折部に箆調整による稜がみられ、反折部分に線状の沈線が施される。岩田4類に比定されるものであろう。

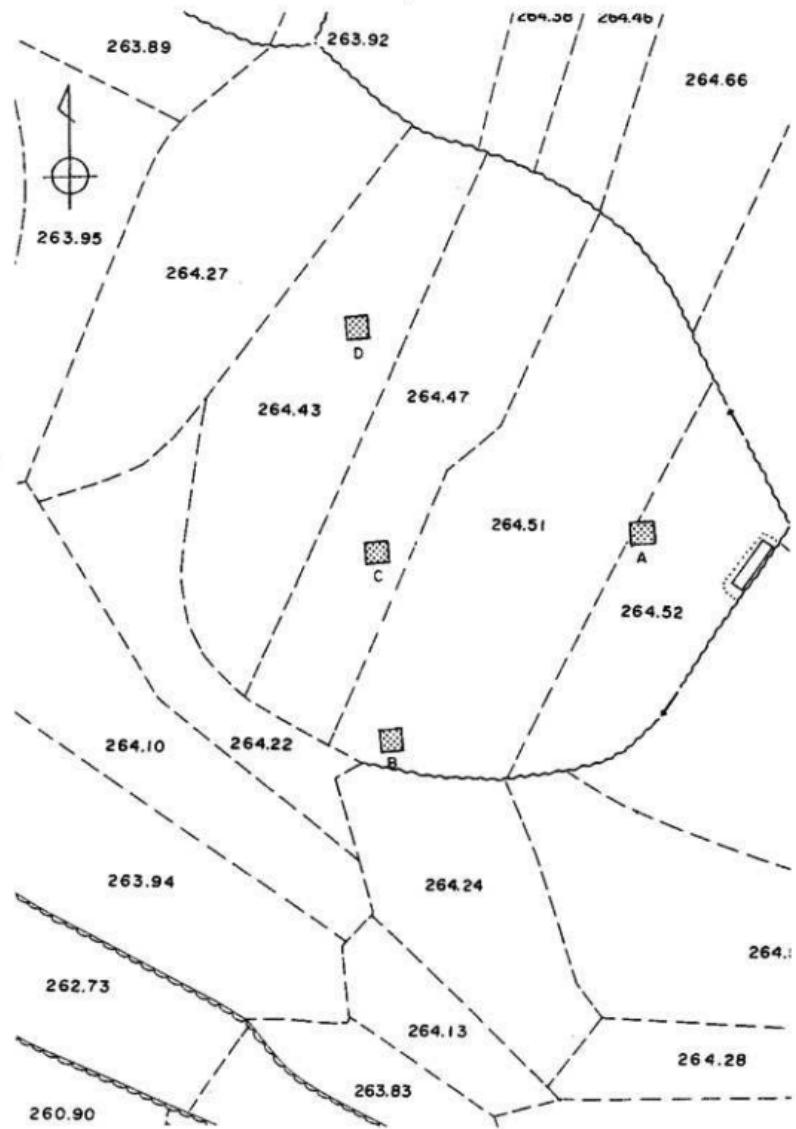
（渡辺 友千代）



第4図 塙添地点遺物実測図

第1表 各地点出土数量表

遺物名	垣添地点			太鼓頭地点			篠田地点			イセ地点			ヨレ地点							
	B	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	E	F
縄文土器	1	76	216		17	103	160	8	92	107	487	4	208	945	3	2	10	62	56	77
弥生土器	1	11	65		9	74	33	10	3	18	74	2	55	88	1		3	4	4	5
古式土筋器			2		2	1														
土鈴器	2	6	3		3		28	79	1	7					1					
須恵器			16					7		1					1					
打製石斧						2														
石斧(打磨)		8	1			4	1	2	1	3				2	3		1			
原石										3	1			1						
石核			2				2			1										
剝片	2	17			4	8	7	4	1	9	8		6	13			5	2	2	
破片			23			18	9	3	4	2	6		3	7			3	3	3	
黒曜石(白)(黒)			4			2	4	1		1	1						1			
骨片	2	9			1		1	1	1	3				4						6
炭化物	1	3					2				16		4	19						23
磨石			1																	
石匙			1																	
石べら			1				1	1												
彫器			1																	
削器					1															
石鍼			1		1	1					2			3						
土版			2		1						3									
撲器		2				3														
石包丁							1		1	1									1	
石材				1	1															
石鎌													1							
石皿														欠2						
鐵石											1									
小計	4	100	376	1	38	214	252	118	104	156	596	6	279	1,068	4	2	13	75	89	93
合計		104			629			632			1,969			276						



第5図 太鼓胴地点配置図

第3章 太鼓胴調査地点

1. はじめに

垣添地点に隣接する太鼓胴は、匹見町大字匹見（イ252）字半田に所在する（第2図）。現地表面標高は約264.3mを測り、小字名を地点名と称することにした。また小字名の地名は、太鼓の胴部によるといわれ、その地形状は横瓶の胴部に似、周囲より若干低地にみえる。

本地点は、南西150m地点を周流する匹見川とは比高差約4.5mを測る河谷いで、対向の北東300mには標高約500mの山裾がせまるという緩斜地に立地する。北西—南東方向には河岸段丘が延び、水田地として利用され、遺跡も点在する（第1図）。

調査は、平成2年10月19日から同年10月24日のうち4日間、38人役を費やし、16m²を行った。

2. 調査の概要

調査対象面積は、約500m²であった。

調査区は、2m×2mの方形区とし、A区と称するものを調査対象地点の東端に任意に磁北方向に設定。B区と称する調査区は、A区から22m西側に延ばした地点から、さらに南側に15m延ばした匹見川沿いに設定。またC区と称する調査区は、B区を設定するためにA区から西側に22m測った地点にA区と併行して設定した。またD区は、C区から18m北に延ばした地点とし、したがって区名は、アルファベット順に右廻りに呼称することにした（第5図）。

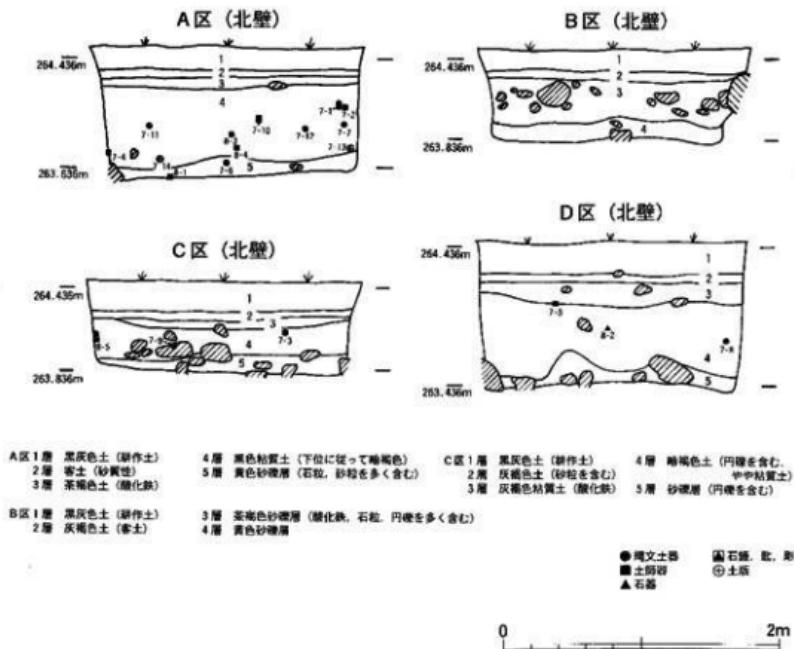
3. 各調査区の概要

A区（第6図、図版3-1）本地点の東端に設けた区で、現地表面標高は約264.5mを測る。1層は、耕作上で、16~18cmを測り、黒灰色土である。2層は、1cm余りの石粒を含む砂質上で、4~6cmを測る、いわゆる客土層である。出土物には須恵器・土師器・弥生土器・石器剝片などの細片がみられた。3層は、酸化鉄が沈着した層で、茶褐色を呈し、層厚は6~8cmを測る。土壤的には下位の黑色土と同質的なものであった。4層は、やや粘質性の黑色土である。層厚は50~60cmを測り、上位面はほぼ水平に堆積するものの下位に従って色調は、漸移に暗褐色を呈し、最下面是乱曲し、その下面には、柱穴・土坑と想定される遺構が検出された。狭幅で把握しきれなかったが、遺物や層位的にみて恐らく縄文後期の遺構とみられる。また遺物は、上位面で須恵器・土師器・弥生土器等の出土比率が高かったのに対し、中位面以下は縄文が優越しているので、層位的に分層が

可能であったのかも知れない。5層は、砂粒や石粒を多く含む黄色砂礫層である。遺物は出土しなかった。

B区（第6図） 四見川沿いに設定した調査区で、現地表面標高は約264.5mを測る。

1層は、層厚14~18cmを測る耕作土。2層は、1cm余りの石粒を含む灰褐色の客土で、層厚は5~7cmを測る。遺物は弥生土器を中心に、繩文土器・土師器・石器剝片が数点出土した。3層は、石粒・円礫が多く含む砂礫層で酸化鉄が沈着し、茶褐色を呈する。層厚は25~36cmを測るが、実質的には土層色調は別として、4層に分層した黄色砂礫層と同一層とみられる。上位面に石器剝片1点と2点の弥生土器が出土している。層序的には、他地区に比べて河沿いの立地的様相が顕著であった。



第6図 太鼓洞地点土層断面図

C区（第6図、図版3-2）西寄りのほぼ中央に設定した調査区。現地表面標高は約264.45mを測る。

1層は、層厚約20cmを測る耕作土。2層は層厚5~7cmを測る客土で、細片の弥生土器・繩文土器・土師器などが數十点出土している。3層は酸化鉄が沈着しているために茶褐色を呈し、中央部は層厚で部分的には間断されるなど、局部な様相を示す。4層は、人頭人の円窓を含む暗褐色土で、やや粘質性を帯びる。遺物としては上位層から土師器が数点、下位層から繩文土器・石器剝片などが30点余り出土したが、遺構は確認されなかった。5層は、いわゆる河床疊で、円窓砂疊層である。

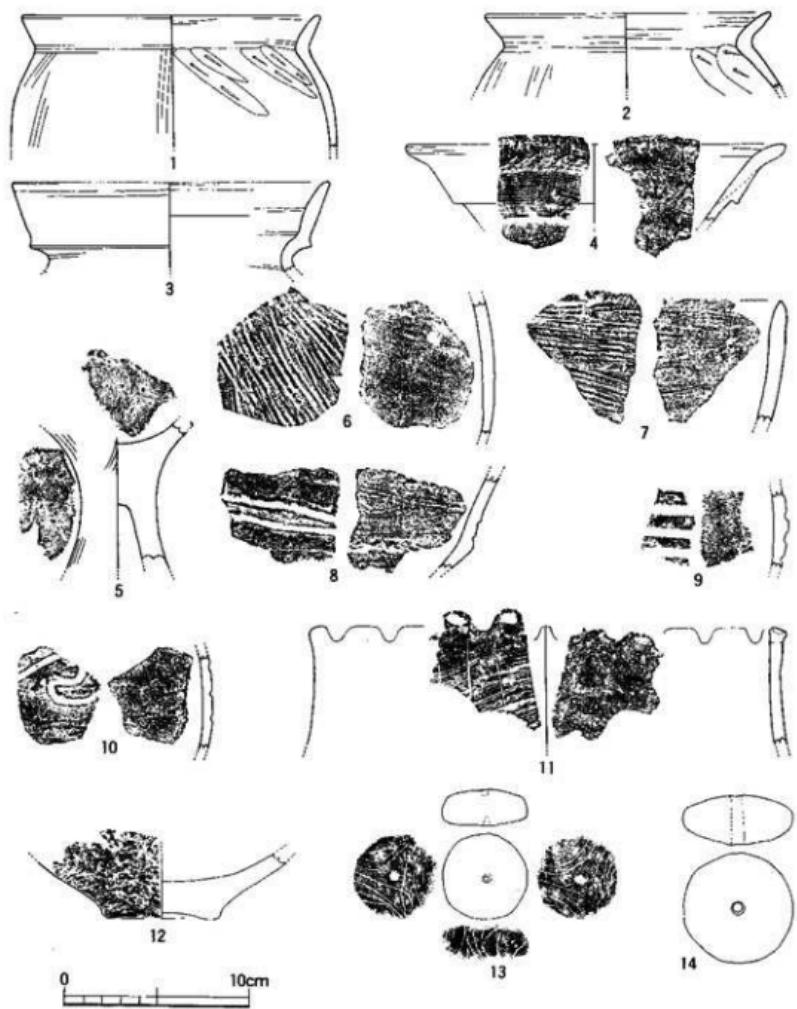
D区（第6図）調査対象地の北東側に設定した調査区で現地表面標高は約264.45mを測る。

1層は、黒灰色をした約22cmを測る水田耕作土。2層は、灰褐色で1cm大の石粒を含んでいる。両層から細片の繩文土器が數十点と、数点の陶磁器や石器剝片が出土した。3層は、やや粘質性の灰褐色土で、酸化鉄が沈着した部分は茶褐色を呈す。層厚は9~17cmを測り、川寄りの南面が薄い。若干の弥生土器と數十点の繩文土器が出土している。4層は20~30cmの大の円窓を含んだ暗褐色土。層厚は40~55cmを測り深層で、やや粘性溝び、下位層は砂質性となり、同位面からは後期に比定される彦崎系のものが出土している。5層は、円窓を多く含む砂疊層で遺物は出土しなかった。

4. 出 土 遺 物

はじめに 本地点からは約700点余りの遺物が出土した。そのうち繩文土器が約400点・弥生土器約150点・石器剝片約70点のほか、土師器・須恵器・打製石斧・石錐・骨片・炭化物・土製品などであった。多出した繩文土器の多半が各調査区の3層下位に出土しており、その約70%がA区で検出されたものである。時期的には繩文後期前半のものが数点確認されたが、多半は後期末から晩期前半のものであった。なおA区4層下面に柱穴・土杭らしき遺構が検出された。

土器・土製品（第7図、図版4-1）1は、胸部は球状を成し、頸部は「く」字状に屈曲する壺で、胎土に粗砂を多く含む。口縁部は横ナデで、外面は乱調気味に縦ナデがみられ、内面頸部下半は箝削りとする。2も1と同じ手法であるが、頸部の屈曲が強い。3は、複合口縁部片で、頸部は「く」字状に短く屈曲し、口縁部は外反しながら開く。色調は黄橙色を呈する。4は、高壺の複合口縁片。内外にベンガラらしく彩色がみられ、3とともに古墳前期の形態がみられる。5は、壺底部で、胎土に2mm大の粗砂を多く含む。色調は黄橙色を呈する。6は、深鉢系の胸部片・外面は縦方向で、内外とも条痕で調整する。外面に煤が付着し、内面は灰色を呈する。8は、粗製系の肩部の折部。反折部分に2本の沈線が施され、内面は条痕、外面はナデを施し、両面とも煤が付着する。9は太め施文具による併行沈線を施した粗製系の上器片。暗褐色を呈し、胎土に2mm大の石英を含む。10は、ナデ調整の後、曲線文を施した中津式系の土器。内外とも黄褐色を呈する。

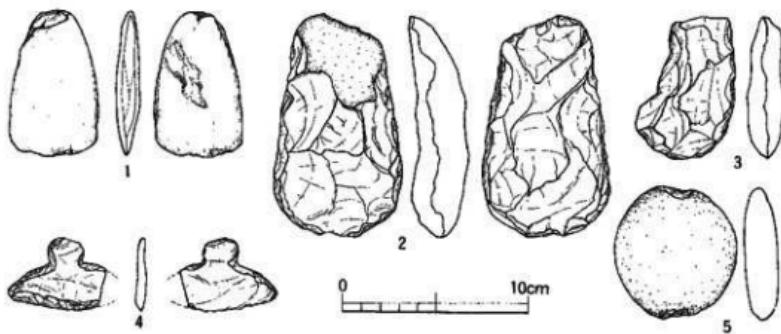


第7図 太鼓胴地点遺物実測図(1)

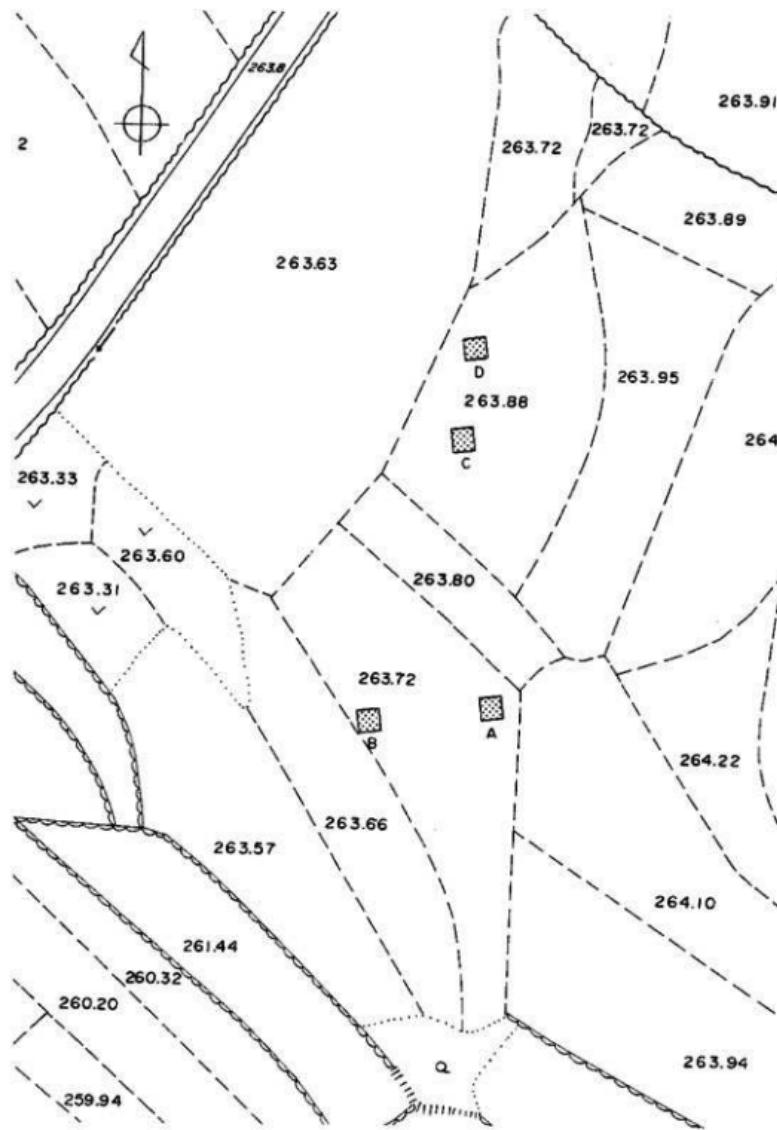
11は突起をもつ粗製系の口縁部。横位の条痕を施した後、疎間に縦方向に細い平行沈線を施文する。12は、粗製系の底部。13は、筋鉤車形土製品。最大直径6cmではば円形を呈し、最大厚は2.7cm。中央部に約6mmの円孔を有する。窓状具で整形の後、ナデで仕上げる。14は、同じく筋鉤車形土製品。最大直径48cm、最大厚は2cmを測る。中央部に背面から中芯に向って約5mmの円孔有すが貫通しない。表裏もA区の4層下位に出土した（第6図）。

石器（第8図、図版4-2）1は、定角式磨製石斧。石材は蛇紋岩で、器長7.3cm、最大器幅4.5cm、最大器厚1.2cmを測る。刃部は両刃で、刀頭は破損する。2は、打製石斧。背面に自然面が残り、腹面に向って弧状を成す。周縁部から二次的打製を加え整形をする。石材は玄武岩。3は、石窓状石器か。4は、玄武岩材による横型石匙。5は、両端を打製加工した打欠石鍬。

（渡辺 友千代）



第8図 太鼓洞地点遺物実測図(2)



第9図 筆田地点配置図

第4章 筆田調査地點

1. はじめに

本地点は、四見町大字四見（イ257）字半田に所在する。該地点は、今回の分布調査では南西端にあって、北西—南東に延びる河岸段丘の端部に立地する。隣接には「荒人社」という聖地（忌地）あり、その周辺で以前から弥生土器や須恵器・土師器などが採集されていたことにより、約400m²範囲を調査対象と選定したものである。

現地調査は、平成2年10月29日～11月2日のうち4日間、41人役を費して行った。また地点名については、小字名の「筆田」によるところから命名したものである。

2. 調査の概要

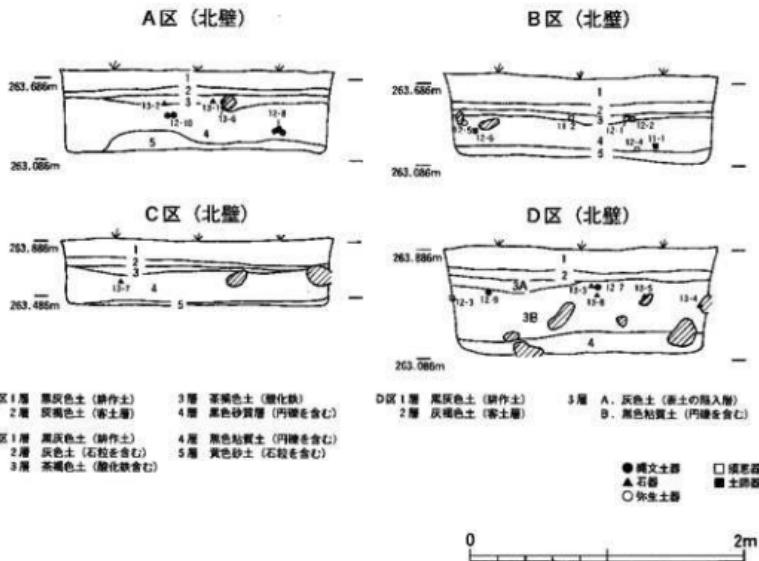
調査の対象とした地点は、河岸段丘端面から北面（山側）側に細長く延びた水田地。現地表面標高約263.7m測り、ほぼ平坦面を成す。

調査は、まず基点を河寄りの南東面に任意に設定した。そしてその基点を中心に南西面に2m×2mの方形区を設定し、A区と称することにした。B区と称する調査区は基点から西へ11m延ばした地点の南西面に2mの方形区を設定。またC区は、基点から磁北に22m測った地点の北西面に設けた。さらにD区地点は、C区地点から磁北側へ6m延長した地点の北東面に2mの方形区を設定した。したがって、D区は基点から30m延長した地点ということになり、またそれらの調査区の地区名はアルファベット順に呼称することにした（第9図）。

3. 各調査区の概要

A区（第10図） 南東面に設定した調査区で、現地表面標高は約263.7mを測る。

1層は、黒灰色をした水田耕作土。層厚は12～16cmを測り薄い。数十点の縄文土器・石器剝片と、数点の弥生土器・土師器が出土した。2層は、4～6cmを測る灰褐色土の客土。3層は酸化鉄が沈着した茶褐色土。4層は、20～37cmを測る砂質性の黒色土で、10～20cm大の円礫を含む。上位面から弥生土器・土師器などが共伴するが、中位面以下は縄文土器が優越し、150点余りが出土した。他に石器剝片約20点、打製石斧3点、石核2点などが確認された。5層は、2～3cmの石粒を含む黄色砂上で、遺物はなく、基盤層と思われる。



第10図 筆田地点土層断面図

B区 (第10図、図版5-1) 調査対象地の南西面に設定した調査区で、現地表面標高で約263.72mを測る。

1層は、層厚17~20cmを測る水田耕作土。数点の須恵器・土師器が出土した。2層は、1cm大の石粒を含む灰色砂質土の客土で、3~7cmの層厚である。数点の須恵器が出土する。3層は、酸化鉄が沈着した茶褐色土。4層は、層厚20~26cmを測る暗褐色土。2~5cm大の小石や10cm大の円錐を含み、南東面が北西面に比べて層厚は6cmはがり厚く、傾斜する。中位面から大片の須恵器・半個体の土師器の甕が出土したが、遺構の検出には至らなかった。5層は、ほぼ水平に堆積した黄色小礫層で、遺物・遺構は検出しなかった。

C区 (第10図) 調査対象地の北西面に設定した調査区で、A区・B区よりも約15cm余り標高は高く、現地表面標高は約263.88mを測る。

1層は、13~20cmを測る水田耕作土で東面が厚い。2層は1cm大の石粒を含む灰色土の客土。西面は7cmと厚いが、東面に向って次第に薄くなっている。遺物としては土師器が数点出土した。3層は、酸化鉄が沈着し茶褐色を呈すが、上質的には下面の黒色土と同層と想定される。4層は、粘

質性の黒色土で、10~20cm大の円礫を含んでいる。層厚は約23cm余りで、ほぼ水平に堆積する。上位面では土師器が数点出土しているが、中位面以下は縄文後期末から晩期初頭の御領式系統のものが數十点出土する。5層は、1~2cm大の石粒を含む黄色砂土層であった。

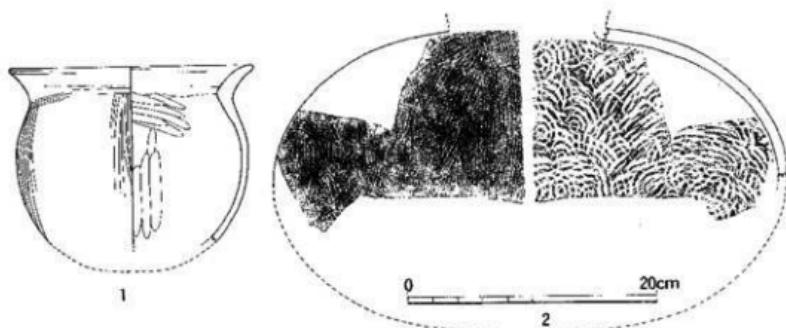
D区（第10図、図版5-2）調査対象地の北西端に設けた調査区で、現地表面標高は約263.89mを測る。

1層の耕作土は、層厚14~18cmを測り、南西面がやや薄い。遺物としては、1・2層から合せて、100点余りの縄文土器が出土し、他に土師器・弥生土器・石器片などが確認された。3層Aは、表土の陥入層と思われる灰色土で、北西面に漏在する部分層である。3層Bは、10~20cm大の円礫を含む黒色粘質土である。層厚は38~40cmを測り、僅か西面に傾斜する。下位層には50~70cm大の岩頭に覆われ、堀削に困難をきわめた。本層では数点の弥生土器が確認された以外、80点余りは、縄文後晩期に位置着けられる縄文遺物であった。4層は、基盤層の円礫砂礫層である。

4. 出 土 遺 物

土器（第11図・第12図、写真2、図版6-1）本調査地では1・2層除く総数632点が出土している（第1表）。

1は、B区に出土した土師器の甕。体部にハケ目調整を施し、色調は赤褐色を呈する。2は、B区3層に出土した横瓶。外面に平行叩き目文が部分的にみえるが、カキ目で仕上げる。内面は同心円文。4・5・6も同様B区に出土したもので、そのうち5は、沈線区画内にクシ描波状を施文する。6は長頸甕の底部か。切り放しは回転ヘラ切りとし、のち回転ナデ。内面は不整形な静止ナデで、



第11図 筆田地点遺物実測図(1)



1. 土師器

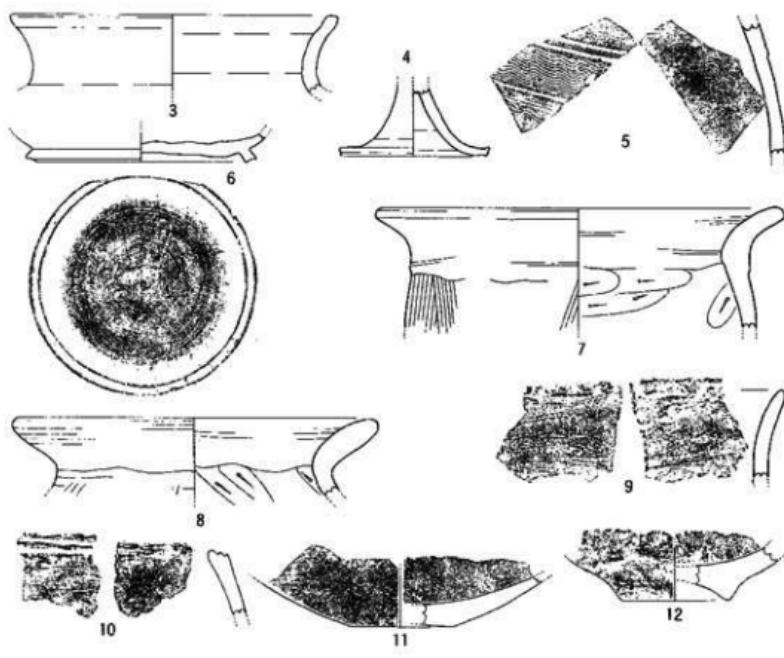


2. 橫瓶

硯台に代用したものか。定一方向に擦痕、墨が残る。型態的7世紀末頃のものであろうか。7・8は、土師器の口縁部。9～12は、縄文土器で、そのうち9は外反する粗製系の口縁部。10は、内傾した精製系の口縁部で、口唇に2条の沈線を施す。内外とも精緻に研磨する。11は精製系の底部。12は粗製系の凹み底。

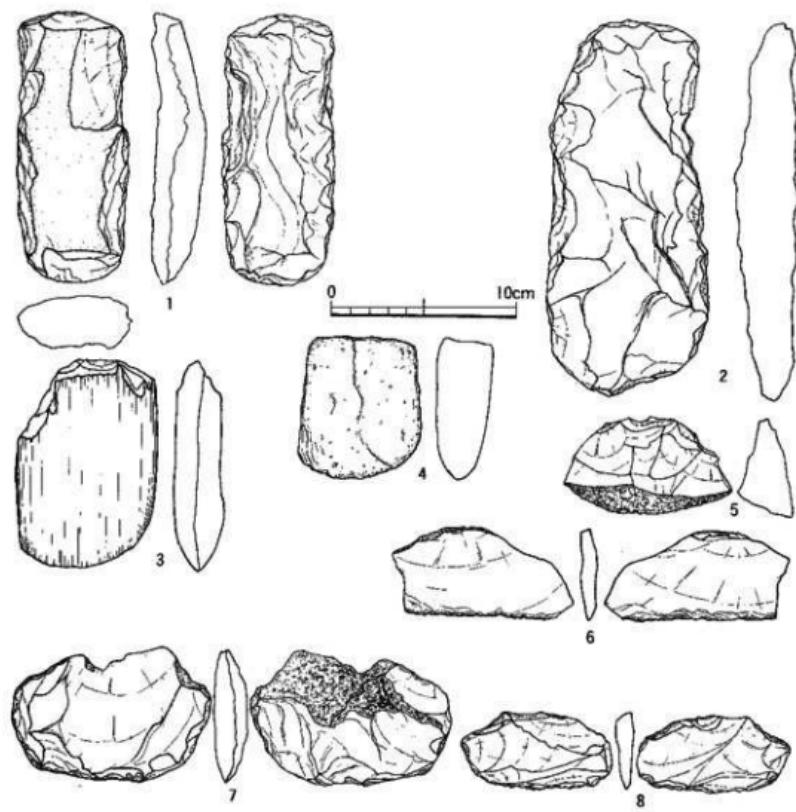
石器（第13図、図版6-2）13・14はA区から出土した打製石斧で、短冊型を呈する。前者は背面に原面が残り、腹面側に弧状を成す。14は、器長20.2cm、最大器幅8.7cmを測り、石質は、玄武岩である。整形の後、周縁部を打製を加え二次加工を施す。15・16は、いずれもD区4層から出土した磨製石斧。前者は蛇紋岩質で、刃部は斜形を呈する。後者は粘板岩で、湿気に腐蝕する。17は、D区4層に出土した安山岩質の石核。定一的な連続剥離面が数次にみられ、縁部の二次的加工が施されていないことから、恐らく石核であろう。18はA区3層から出土した石包丁形石器。單一打製した薄面側に、極浅の両面細部調整をする。19は、安山岩質の楕円形石器。刃部面に細部加工を施す。

（渡辺 友千代）

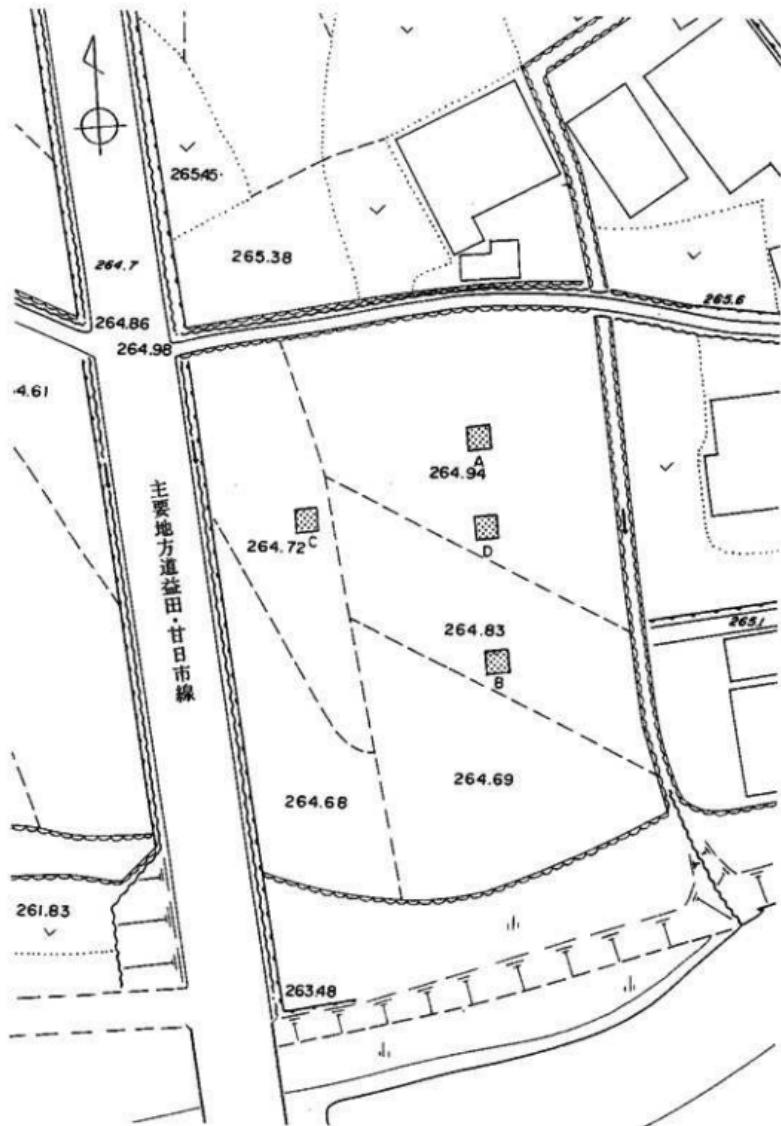


0 10cm

第12図 筆田地点遺物実測図(2)



第13図 筆田地点遺物実測図 (3)



第14図 イセ地点配置図

第5章 イセ調査地点

1.はじめに

匹見町大字匹見（イ276）字半田に所在するイセ調査地点は、昭和60年、隣接する西田保氏の宅地内で縄文土器が採集されたことにより、周知の遺跡であったため、今回の調査となったものである。したがって調査地点名は、その宅地名を踏襲することにしたのである。

本地点は、南面を比高約6.5mを測って西流する匹見川が至近にひかえ、その流沿に従って河岸段丘が発達している。一方、対向の200m北東には比高約200m測る山裾がせまっていものの、対岸の南西には北流した広見川が相会し、いわゆる合流地の沖積地に立地している（写真1、第14図）。現地調査は、平成2年11月5日～同年11月19日までのうち9日間、72人役を費して行った。

2. 調査の概要

調査は約600m²を対象範囲とし、2mの方形区を3個所に設けることにした。

まず、調査基点となる地点を北東面に任意設定し、その地点の北西面に2mの方形区を設けた。これをA区とし、B区と称する調査区は、A区の基点南東隅から南側（匹見川側）へ18m測った地点の南西面に2mの方形区を設定した。またC区と称する調査区は、A区の基点から南側に6m測り、さらに西へ16m測った地点の北西面に設けたのである。しかし堀削の段階で、A区では遺物が多く出するにもかかわらず、B区では思わしい結果が得られなかつたので、範囲の把握上、A区とB区の間にD区と呼称する調査区を設けた。つまりA区地点から南へ8m測った地点の北東面である。したがって地区名に順位性がみられないのは、そのためである（第14図）。

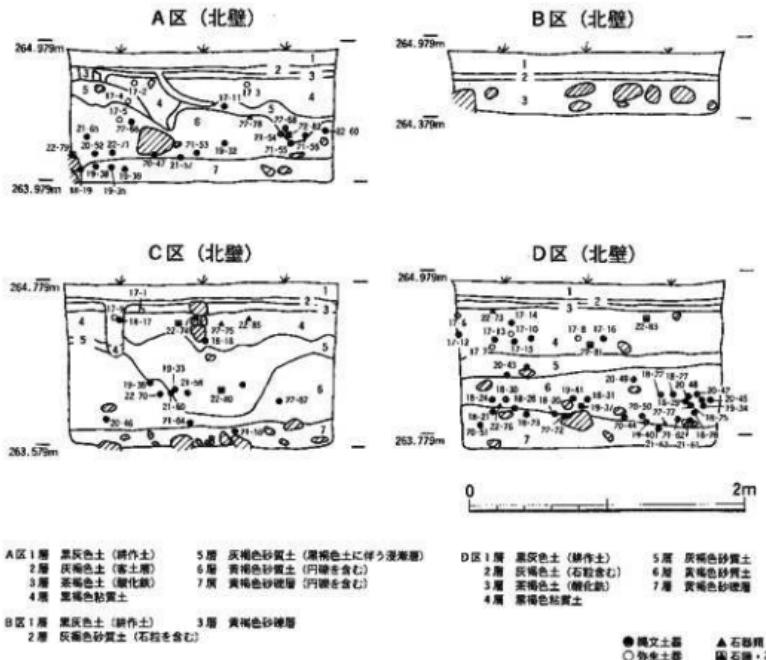
3. 各調査区の概要

A区（第15図） 調査対象地の北東面に設定した調査区で、現地表面標高は約264.9mを測る。

1層は、黒灰色を呈した水田耕作土で、層厚は約12cmを測る。2層は、1cm大の石粒を含んだ灰褐色土の客土で、層厚は約50cmを測るが、西面に極部的に欠落部分もみられた。両層からは弥生土器・石器剝片など6点が出土している。3層は、酸化鉄が沈着した茶褐色土で、組成的には下位の4層と類似する。4層は、やや粘性的な灰褐色土で、東面に向って陥入しており、層厚は16～20cmを測るが、その層厚も西面では上昇し薄くなっている。この“陥込み”状が遺構であったのかは、精査していないので確認することができなかった。同層からは弥生土器が多半を占め約50点が出土した。

している。5層は、4層黒褐色土に伴う浸漬層と言えるもので、やや砂質性の灰褐色土であった。取り上げの精査性に欠けるが、同層からは遺物の出土傾向として縄文晚期のものが若干確認されたことから、同時期の包含層とみることができよう。しかし弥生土器の出土は、見逃していると思われるが、弥生遺構が存在したということであろう。6層は、下位面に人頭大の円礫を含んだ砂質性の黄褐色土である。下位の層界面はほぼ水面に堆積するものの、上面は乱曲する。層厚は東面側が薄く、西面向って上昇して厚く、約50cmを測る。遺物としては、上位面を中心に縄文後期後半の縄帶文等が出土し、下位面には鎌崎式など後期前半のものが確認された。7層は、遺物を作わない円礫（10cm大）を含んだ黄褐色砂礫層であった。

B区（第15図、図版7-1） 調査対象地の南東面（匹見川側）に設定した調査区で、現地表面標高は約264.85mを測る。



第15図 イセ地点土層断面図

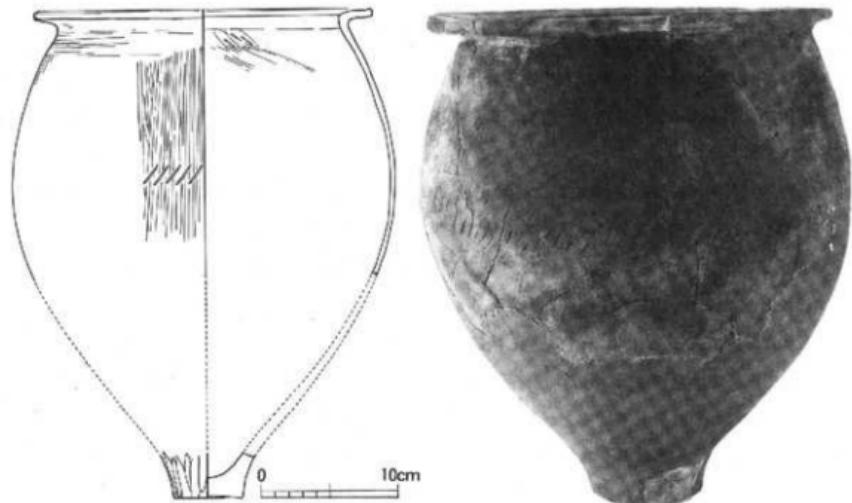
1層は、黒灰色した水田耕作土で、層厚は14~16cmを測る。2層は、1cm大の石粒を含む砂質性の灰褐色土。両層からは弥生土器17点を含め、石器剣片・土師器など38点が出土した。3層は、黄褐色砂礫層で、10cm大から人頭人の円礫を多く含む。上面に縄文土器4点、弥生土器2点が出土しているが、これは恐らく造田時などに混入した遺物と想定される。

C区（第15図、図版7-2） 調査対象地の両面のほぼ中央寄りに設けた調査区で、現地表面標高は約264.73mを測り、A区調査区より20cm余り低い。

1層は、層厚10~12cmを測る水田耕作土。2層は、1cm大の石粒を含んだ灰褐色の客土で、層厚約3cmを測り、ほぼ水平である。両層から弥生土器30点、須恵器4点など38点が出土した。3層は、酸化鉄を含んだ茶褐色土で、層厚約6cmを測るが組成的には下位の4層と同様層とみられる。4層は、20~30cmを測る粘質性の、黒褐色土で、上面はほぼ水平に堆積するものの、下面は乱曲する。同層から弥生土器を中心に60点余りが出土している。5層は、袋状に陥入した砂質性の灰褐色土で、深層部の層厚は約50cmを測り、上昇部は5~10cmと薄い。また杭状形の坑底部の嵌入が北壁面に1個所、西壁面に3個所、東壁面で2個所みられたが、坑部内の組成上の大部分は耕作上であるため、恐らく籠架類の柱杭であろう。しかし間隔的に近いこと、本層の陥入部沿いに並列することなど、気になる。ただし、その陥入的形状部が遺構であるかが問題であるが、凡そ縄文晩期包含層として捉えられる本層以外（例えば6層上昇部）にも同時期の遺物分布がみられたことなどから、はつきりと断定できない。むしろ上層の黒褐色土からの組成の関係による浸漬模様化とも言え、浸漬層として捉えることができそうである。6層は、砂質性の黄褐色土で、上面層界は大きく乱曲するものの、下面是ほぼ水平で10cm大の円礫を含んでいる。層厚は深い所で約60cm、浅い所で約8cmを測る。本層から約160点の縄文遺物が出土した。7層は、人頭大の円礫を含む黄褐色砂礫層の基盤層である。

D区（第15図、図版8-1） A区とB区の間に設定した調査区で現地表面標高は約268.8mを測る。

1層は、黒灰色した水田耕作土で、層厚は10~12cmと薄い。2層は、灰褐色した客土で、1cm大の石粒を含む。層厚は3~4cmを測る。両層からは弥生土器19点・土師器8点など合わせて39点の遺物が出土した。3層は、酸化鉄が沈着した茶褐色土で、層厚2~4cmを測る。4層は、粘性帯びた黒褐色土で、層厚は30~35cmではほぼ水平に堆積する。出土遺物は多半が弥生土器であるが、下位面中心に縄文土器が若干みられ、凡そ80点余りが検出された。5層は、灰褐色砂質土で、層厚は10~18cmを測り、西面が深い。上層色調は別にして組成上からみれば、下位層の6層に類似するようと思われる。本層からは弥生土器も出土しているが、縄文晩期包含層として捉えられる。6層は、黄褐色砂質土で、10cm大の円礫を含む。層厚は20~44cmを測り、東面側が深い。出土遺物としては、



第16図 イセ地点遺物実測図(1) 弥生中期土器

上位面に縄文晩期に比定できる土器が検出し、中位面以下は縄文後期など、合せて約700点余りであった。7層は、10~20cm大の円礫を含んだ黄褐色砂礫層で、無遺物層である。

4. 出 土 遺 物

はじめに 本地点の調査面積16m²から1,969点（1・2層は除く）の遺物が検出された（第1表）。そのうちD区では1,088点と、他地区に比べてもっとも多く半数を上回っている。また匹見川寄りに設定したB区では6点と僅少で分布の疊密性が把握できる。したがって、その集中性を対象地内の北東面に捉えられることができる。

土器（第16図～第22図、図版8-1～図版12-2） 1は、複合口縁部で、ゆるやかに外反し、端部は丸み帯び、調整は内外とも横ナデを施す。古墳初頭の小谷式か。2・3は、「く」字形を呈する口縁部で、端部は逆「V」字形につくり出し、後者は刻目を施している。口縁内外は横ナデであるが外面頸部下半は縦方向のハケ目調整を施す。色調は前者、白灰色、後者は白橙色を呈し、いずれも堅緻で、弥生中期中葉のものであろう。4は、弥生中期中葉の壺の頸部に突唇刻目文を有し、横ナデ。肩部は縦位方向のハケ目を施す。色調は白橙色を呈する。5は、肩部に沈線、その下面に涙滴状の刺突を連続施したもので、胎土に2mm大の石英を含んでいる。第16図は、頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外傾する。口縁部は横ナデで、余り張らない胴部に縦方向のハケ目調

整を施し、横位にクシによる斜め方向の刺突文を連続させる。底部外面はヘラ磨きである。6~10は弥生前期の上器片、そのうち6は、口縁端に刻目を施した甕で赤褐色を呈する。またハケ目地に直線文(7)、または破線状文(8)を施文したもの。9は、石英を含んだ赤褐色の底部。10は、弧状文の壺であろう。

11は、斜向状に集線された縄文土器。内外とも精緻に研磨され、胎土に金雲母を含み、暗褐色を呈する。12は、突帯文十器の直交気味の口縁部。内面は精緻にヘラによる研磨が認められるが、突帯部上は板目状ナデ調整である。また突帯部下にはヘラ状具による斜向状の集線が施文される。11・15後出と同様、中山B式土器に比定されるものであろう。13は、突帯部上から「C」状に屈曲し、端部は外向に尖る。内面は黒色を呈し精緻にヘラ磨きし、外面はナデか。14は、突帯頂部が上がり氣味で肥厚い。刻目はヘラ状具で斜押圧する。内外ともヘラ磨きで、突帯部下に横位の沈線を施す。15は、肩部から外反して立ち上がる刻目突帯文土器。口縁部外面は、C形状に下部に反り返し突帯をつくり出す。刻目はヘラ具で斜押圧し、その部下は集線の斜向沈線を施す。内外とも精緻にヘラ状具で磨くが、疎なす外面肩部以下はヘラ削り。色調は灰褐色を呈する。16は、口縁端が円く、突帯部を棒状施文具で押正したもの。18は、凹線を施文した精緻土器で、内外とも精緻に磨く。注口土器か。20は、鉢形の粗製土器。23・25は、粗製の椀形土器で、いずれも条痕で調整する。28・29・30は、口縁部を短く把厚させた深鉢系の精製土器。恐らく津窯A式その直後の時期のものであろう。31は、口縁を肥厚させた瘤形の精製土器で、内外ともに丁寧にヘラ磨きをし、色調は暗褐色を呈する。32は、内傾気味に立ち上がり、口縁部で肥厚させ、短く外反する。内外とも条痕調整で、橙色を呈する。33も類似型態のものであろう。34は、縁帶文に伴う粗製土器で、貼付突帯文である。35・36・37は、「山」型突起をもつ口縁部。そのうち37は突起端に竹管状の施文具で刺突する。こうした型態のものは西部瀬戸内にも分布しており、後期前半のものであろう。また36は、玄界方面でもみられるもので、津窯A式に併行するものと思われる。38~54は、口縁部に刻目をつけた上器で、凡そ縁帶文土器に伴うものであるが、44・49は中津式に併行するものと想定される。後者は肥厚の波状口縁部で、端部に巻貝による押圧がみられる。また波状部外面に巻貝による凹線を施し、その凹線上に竹管状に巻貝を刺突したもの。内外ともヘラ状具で調整した後、ナデ仕上する。このような口縁部連続貝殻文土器は、月崎上層c・dや波子でも検出されている。55は、口縁外面に突帯状につくり出し、その上面に1条の沈線を施した縁帶文十器。59は、曲線を施文する口縁部で、内面は条痕、外面はヘラ磨きである。色調は橙灰色。福田KⅡ式に併行するものか。61は、典型的な津窯A式土器で、内外とも条痕で調整するが、肥厚させた外面口縁部帶に施文を集約させる。62は、頸部がすぼまった精製土器。内面はヘラ調整し、外面に太めで深い曲線文で縄文帯と、黒色ヘラ磨きした磨消帯を浮彫りする。文様的には小池原上層式に類似性をみるが、形態には福田KⅡ式の後

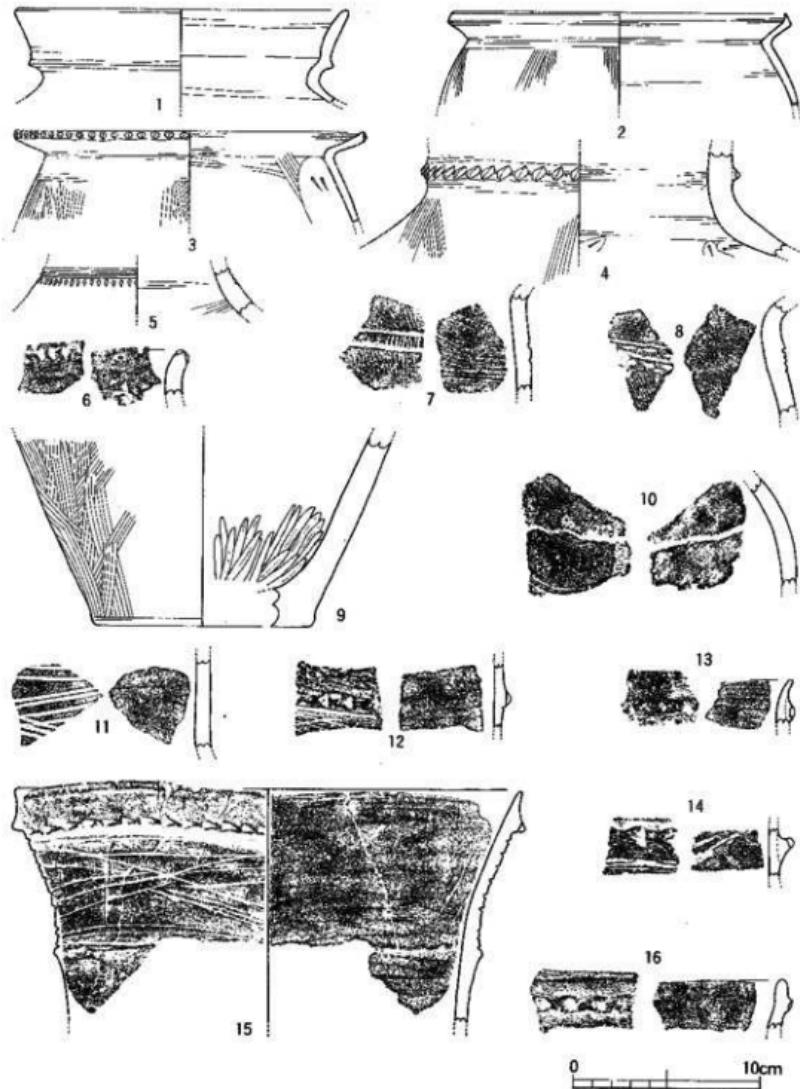
出のものと思われる。64・66は福田KⅡ式土器。68は、板目状施文具による曲線ハケ目文の注口土器で、彦崎KⅡ式（一乗寺K式）に併行するものであろう。70・71・72は粗製系の底部。

石器（第22図、図版12-2） 73・74・75は、玄武岩質の打製石斧。1はD区5層。74・75はC区5層から出土したもの。76は、D区6層から出土した半磨製石斧の基部。77は、砂岩質の石皿で、磨面に不整形な擦痕がみられる。78～83は、石錘。84は、C区4層から出土した玄武岩質の石錐。つまみをもち錐部は丁寧に細部加工を施す。86は、C区2層から出土した三角形の無茎鐵。

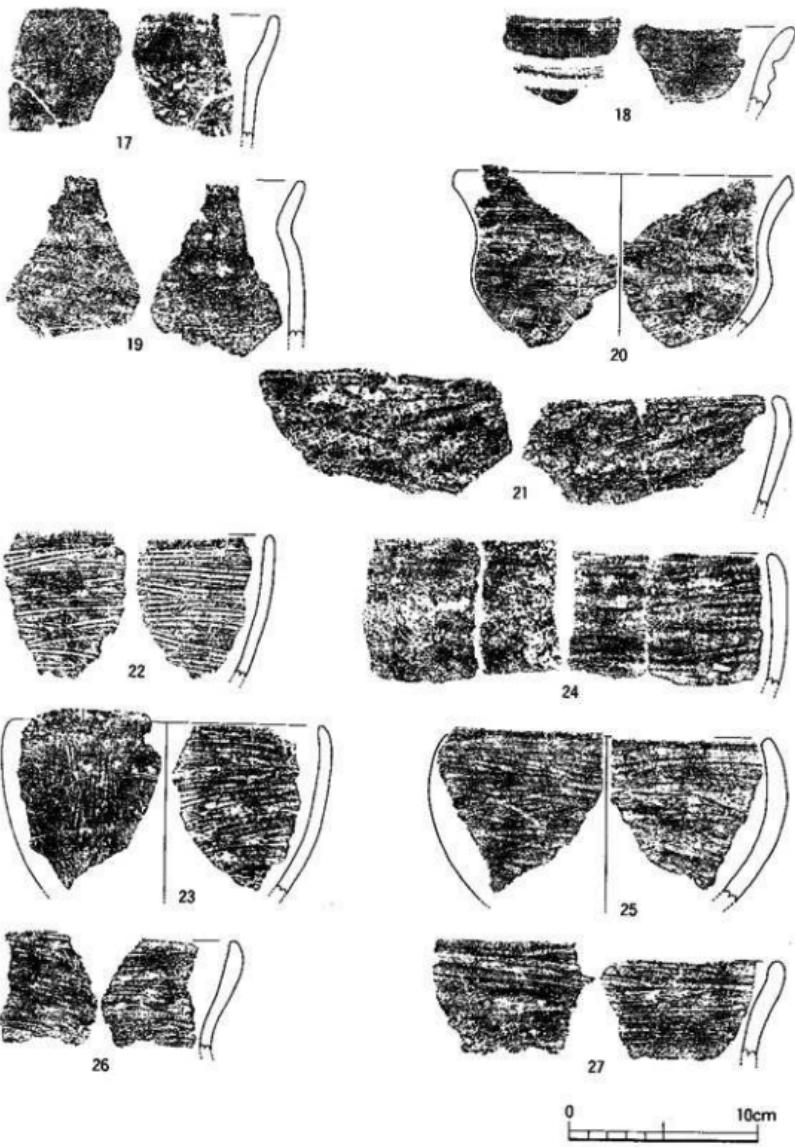
（渡辺 友千代）



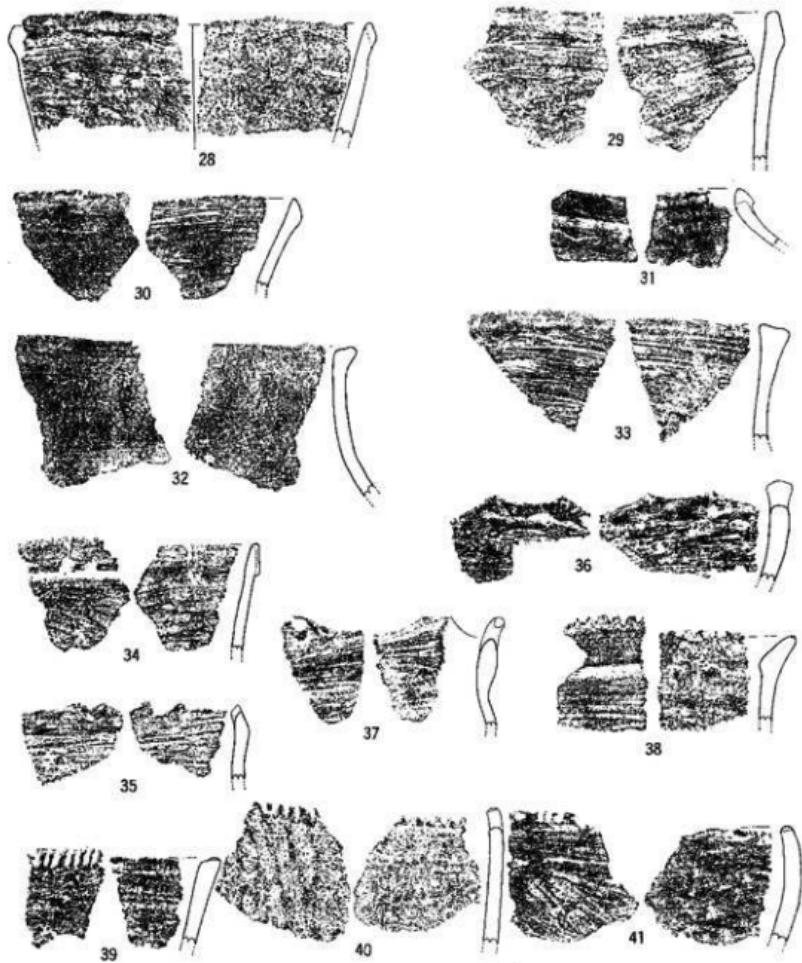
出土状況（イセ地点D区）



第17図 イセ地点遺物実測図 (2)

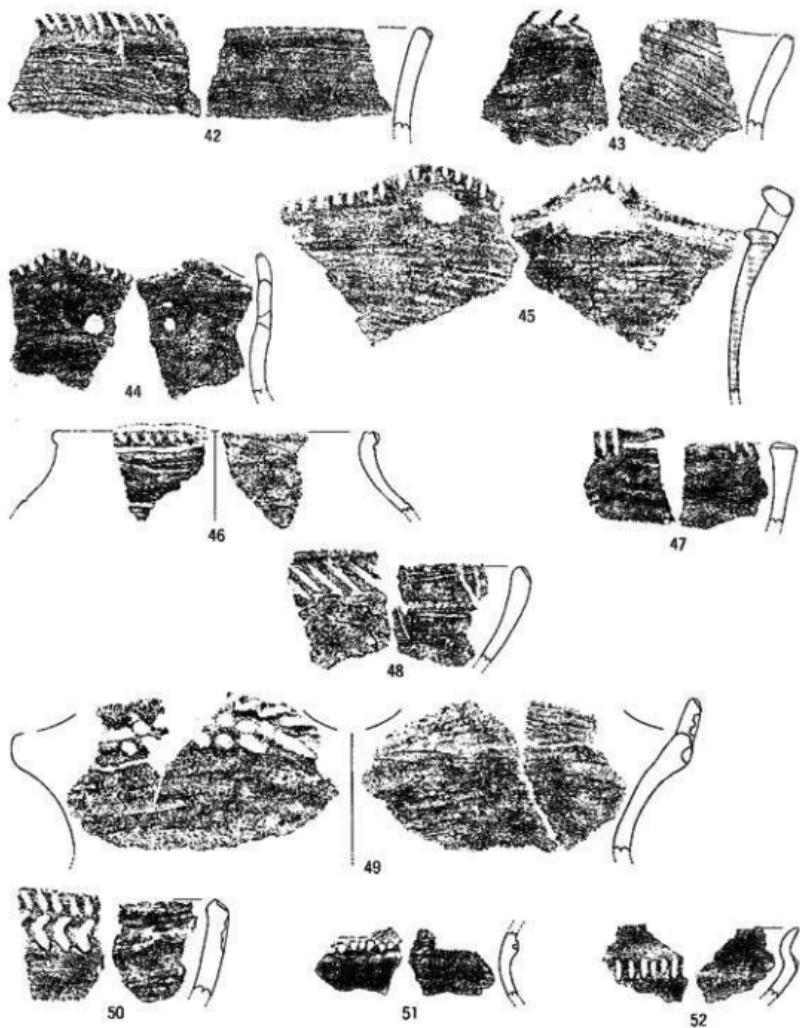


第18図 イセ地点遺物実測図 (3)

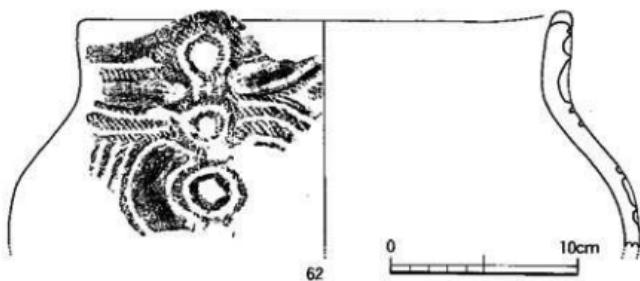
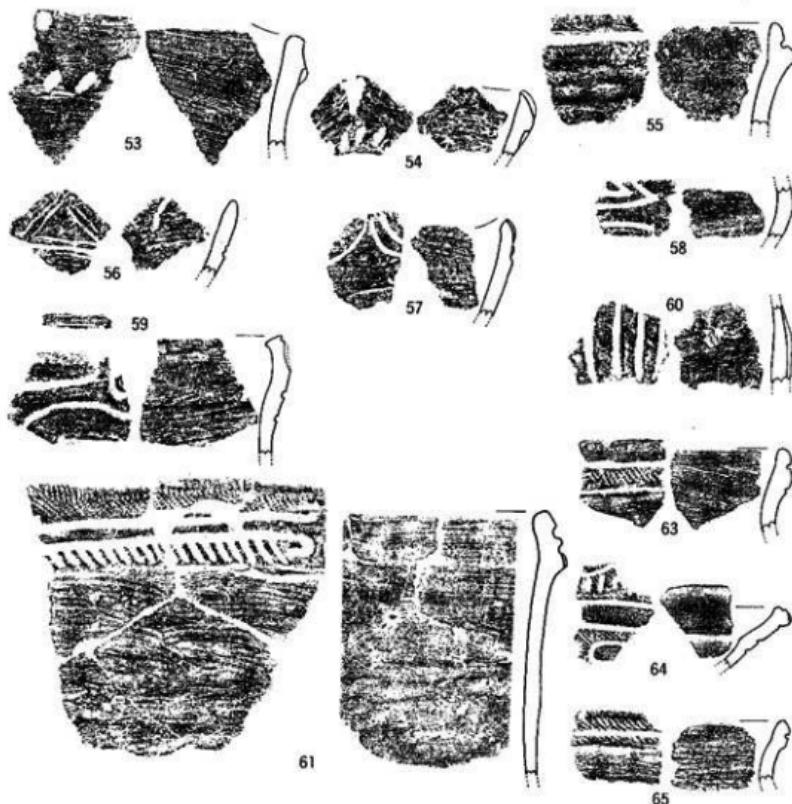


0 10cm

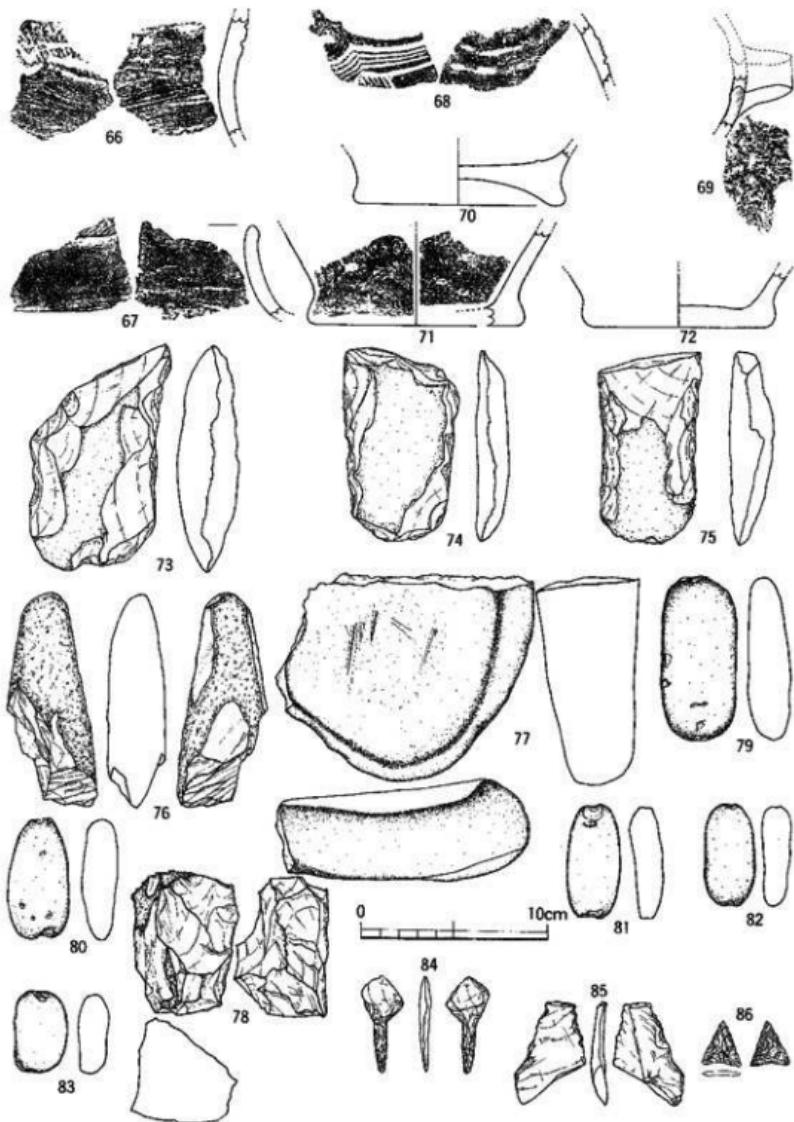
第19図 イセ地点遺物実測図 (4)



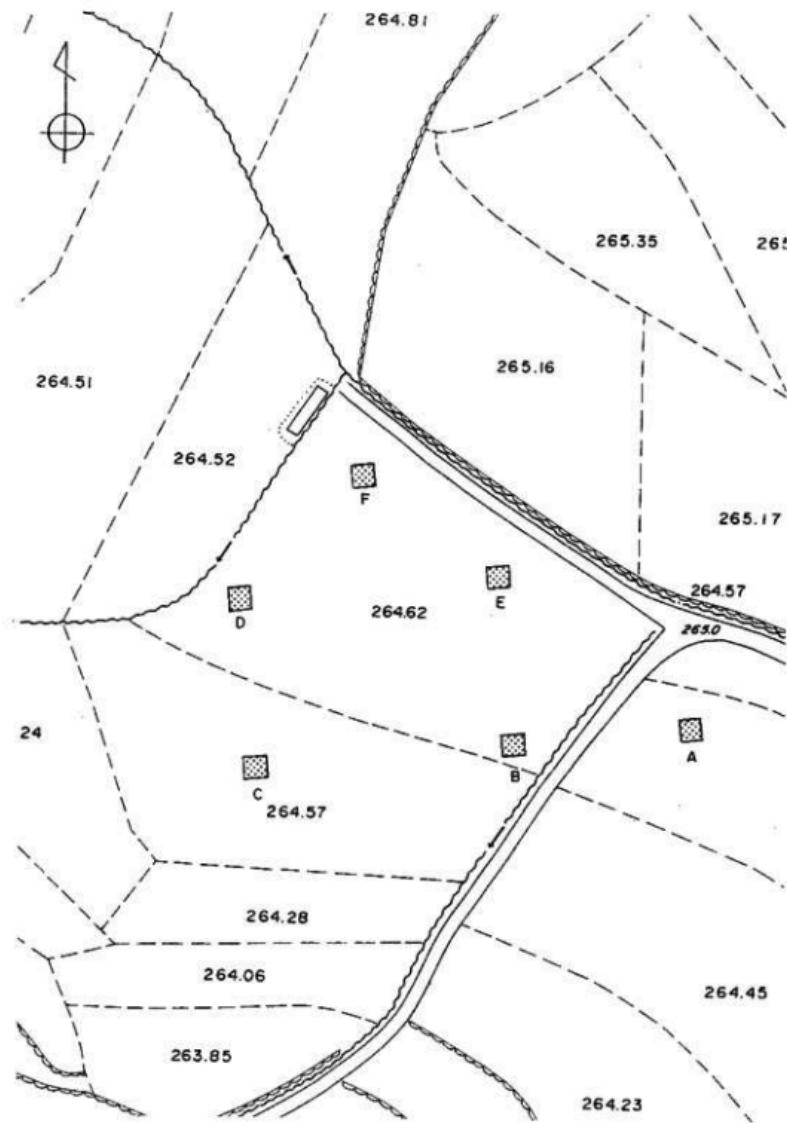
第20図 イセ地点遺物実測図 (5)



第21図 イセ地点遺物実測図(6)



第22図 イセ地点遺物実測図 (7)



第23図 ヨレ地点配置図

第6章 ヨレ調査地點

1. はじめに

本地点は、匹見町大字匹見（イ270）字半田に所在する。当該地は、垣添地点と太鼓洞地点とを丁度、二角形に結ぶように隣接する位置にあって、匹見川とは比高差約4.5mを測る河岸段丘の南端に立地する（第23図）。本地点を調査対象に選定したのは、当該地の畦畔で1985年に斎藤博章氏によって、縄文の硬玉製勾玉が採集されたことにより、周知の遺跡として認定されていたためであった。

現地調査は、平成2年12月4日～同年12月15日のうちの7日間、39人役を費して行った。

2. 調査の概要

調査対象面積は、約300m²の水田地である。現地表面標高は、約264.65mを測る平坦地に形成されている。

調査基点は、太鼓洞地点のA区南東杭に求めた。まず同基点から南（匹見川側）へ18m延ばした地点の北東面に2m×2mの調査区を最初に設けた。そして同地点から15m南へ延長した地点の北東面に2mの方形区を設け、さらに同地点から東に21m測った地点に3番目の調査区を設定した。当該地が東一西に細長い区画地であったため、東への延長をさらに16m測った地点をとり、その地点へ4番目の調査区を設けた。

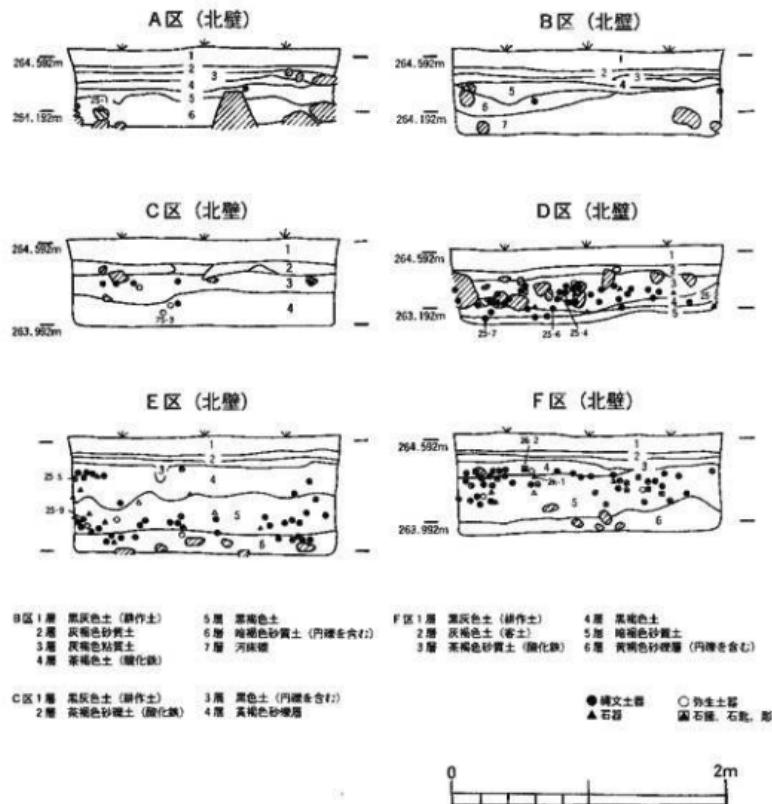
調査区の呼称については、アルファベット名とし、その順序は東側から称名することとした。したがってA・B・C・Dの地区名は、設定順の逆ということになる。しかし掘削後、勾玉が出土してはまとまりのない出土状況であったため、あらたにE・Fなる調査区を増設することにした。そのE区は、B区地点より23m東へ延長した地点に設け、F区はB区同地点から東に10m測った地点から、さらに磁北へ8m延ばした地点の北東面に2mの方形区を設定したのである（第23図）。したがって調査面積は24m²であった。

3. 各調査区の概要

A区（第24図） 調査対象地の東端に設けた調査区で、現地表面標高は約264.64mを測る。

1層は、層厚12～15cmを測る水田耕作土。2層は、1cm大の石粒を含む灰褐色土の客土。これらの1・2層からは縄文土器6点・弥生土器8点の他、石器剝片や須恵器・陶器などが数点出土した。

3層は粘質性の灰褐色土で層厚は深い部分で15cmを測り、南面に遍在する。同層からは土師器が南壁面に出土（第25図、図版14-1）した。4層は酸化鉄が付着した茶褐色土で、層厚3~12cmを測り、下面層界は乱曲する。5層は、円錐を含んだ黒褐色土で、北面側は5~13cmと薄いが、南面側（匹見川側）は人頭大の円錐も出土し、やや厚い。繩文土器3点が出土した。6層は、石塊に覆われた黄褐色砂礫層で遺物はない。



第24図 ヨレ地点土層断面図

B区 (第24図、図版13-1) 現地表面標高は約264.63mを測るが、3cm余り南東が低い。

1層は、約14cmを測る黒灰色した水田耕作土で、やや南東面が低い。2層は、2~5cmの層厚をもつ砂質性の灰褐色土である客土。両層からは石器剝片4点、縄文土器7点が出土した。3層は、東面側に極部的に覆う粘質性の灰褐色土である。4層は、酸化鉄が沈着した茶褐色土。5層は、黒褐色土で、西面側を北一南に陷入して貫通する。層厚は深いところで約30cmを測り、幅120cmの溝状を形成している。同層からは遺物は縄文土器3点が出土するものの、出土数あるいは層序の形成から、遺構というより自然層として捉えた方がよかろう。6層は、やや砂質性の袋状に陷入する円礫を含んだ暗褐色土で、遺物は確認されなかった。7層は、円礫を含む河床礫であった。

C区 (第24図) 調査対象地のはば中央の川沿いに設定した調査区で、現地表面標高は約264.6mを測る。

1層は、層厚14~22cmを測る水田耕作土。2層は、1~2cm大の石粒や砂礫を含む客土で、酸化鉄が沈着するため茶褐色を呈する。3層は、5cmから人頭大の円礫を含んだ黑色土で、12~30cmの層厚を測り、層界面は乱曲する。遺物は弥生を含む縄文土器が散点出土したが、遺構らしきものは確認できなかった。4層は、遺構・遺物を伴わない黄褐色砂礫層である。

D区 (第24図) 調査対象地の西端に設定した調査区で、現地表面標高約264.6mを測り、やや湿田を呈する。

1層は、層厚約15cmを測る水田耕作土。2層は、3~7cmを測る灰褐色をした客土。遺物は両層含めて、縄文土器50点の他、欠損した打製石斧1点、石器剝片4点・陶器2点が出土した。3層は、多くの円礫を含んだ黑色土で、層厚は10~25cmを測り、下面の層界は乱曲する。同層からは60点余りの縄文土器や、他に弥生土器・石器剝片など数点が出土する。下位の4層は、層厚約7cmを測る砂質性の淡暗褐色土である。5層は、黄褐色土である。5層は、黄色砂質土であった。

E区 (第24図) E区は、石垣によって一段高い垣系地点に接する調査区で、現地表面標高は約264.62mを測る。1層は、12~14cmを測る水田耕作土。2層は、砂粒を含む灰褐色土で、層厚は約4cmあり、ほぼ水平である。遺物は縄文土器や石器剝片を含め30点余りが出土した。3層は、酸化鉄が付着した茶褐色土で、層厚は約5cmであるが、極部的には陷入した部分もみられ、組成的には下位の4層と同質土と想定される。4層は、やや砂質性の暗褐色土で、層厚は20~28cmを測り、上面は水平であるが、下面の層界は乱曲する。同層からの土器片を中心に、縄文遺物が80点余り出土しており、また1点であるが滑石混入(阿高式)土器も確認された(第25図)。遺構は確認することができなかった。5層は、粘質性の黄褐色土で、層厚は15~30cmあり、下位面は南面側に向ってやや薄くなっている。上層断面図では、木層に出土しているようにみえるが、これは陷入土坑などのものが投影された結果であって、遺物は出土していない。6層は、10~15cm大の円礫を含んだ

黄色粘質上で、遺物は出土しなかった。

F区（第24図、図版13-2）調査対象地の北西端に設定した調査区で、太鼓洞・埴添両地に隣接する。現地表面標高は、約264.62mを測る。

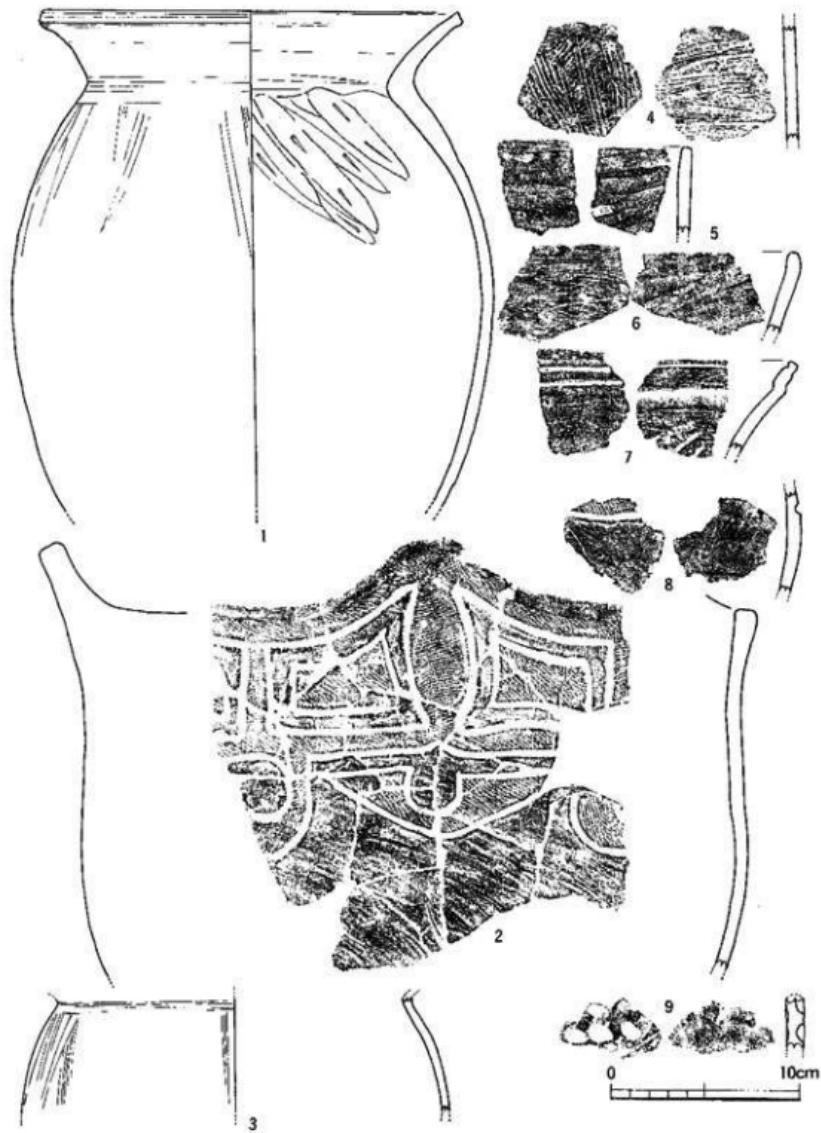
1層は、層厚12~14cmを測る黒灰色した水田耕作土。2層は、3~7cmの層厚をもつ客土。内層からは縄文土器50点、石器剝片12点の他、土師器・須恵器・石器など數点が出土した。3層は、酸化鉄が沈着して茶褐色を呈した砂質土。4層は、極部的に堆積した黒褐色土で、他の壁面にも部分的に表出するが、全体的に薄い。5層は、やや砂質性の暗褐色土で、層厚は30~37cmを測り、比較的深層に堆積する。同層は縄文包層と推定され、77点の縄文土器、石器剝片5点の他、骨片6点も出土している。また南西隅には深さ38cmの陥ち込みが確認されたが、杭内には遺物は検出されず、また狹掘であったため全体的把握ができず、遺構であるという判定はできなかった。6層は、遺物・遺構とも検出されない10cm大の円錐を含んだ黄褐色砂礫層であった。

4. 出 土 遺 物

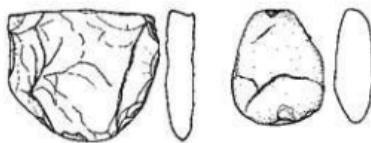
はじめに 本地点からは480点の遺物が出土している。そのうち209点は、後世の行為による1・2層から出土したものであって、取り上げ実測は行っていない。したがって実測したものを見基準にみていくことにする。

A区・B区は2・3点と出土数は少く、C区も東面は希薄であった。したがってD区の75点、E区89点、F区の93点にみられるように、その集中度は北西面に偏在する、ということができる。また時期的には弥生土器も検出されているものの、大半は縄文晩期のものと想定され、3層の黒色土に多出する傾向がみられた。ただし下位（暗褐色土層）には、中津式（第24図、図版14-1）も検出されているように、縄文後期初頭も存在し、また1点であるもののD区下層に検出された滑石混入の阿高式土器など、これらが層位的分層ができるものかは、精査していない現状では把握しきれなかったのが実状であった。

土器（第25図、図版14-1・図版14-2）1はA区4層に出土したもので古墳末期のものか。頸部は「く」字状を成し、長く口縁部に突き出すように外反する。口縁部外面は複合口縁で、2条の沈線が施文され、内外ともナデである。体部外面は乱調気味の縱方向のナデで、内面はヘラ調整する。器壁は薄く、色調は黄灰色を呈する。2はD区の3層下面に出土した中津式土器。胴部はあまり張らず、肩部下半は条痕調整とし、上部から波頭部まで弧状線で枠区画する磨消縄文帯をもつ。内面は丁寧にヘラ磨きし、色調は黄橙色を呈する。3は弥生土器の肩部。外面はハケ目調帳とし、内面はヘラ磨きする。器壁は薄くきわめて堅緻である。5はD区4層から出土した縄文土器。内外をヘラ状施文具で調整する。7は浅鉢系の口縁部で、外面に2状の凹線が施文され、端部は角い。



第25図 ヨレ地点遺物実測図 (1)

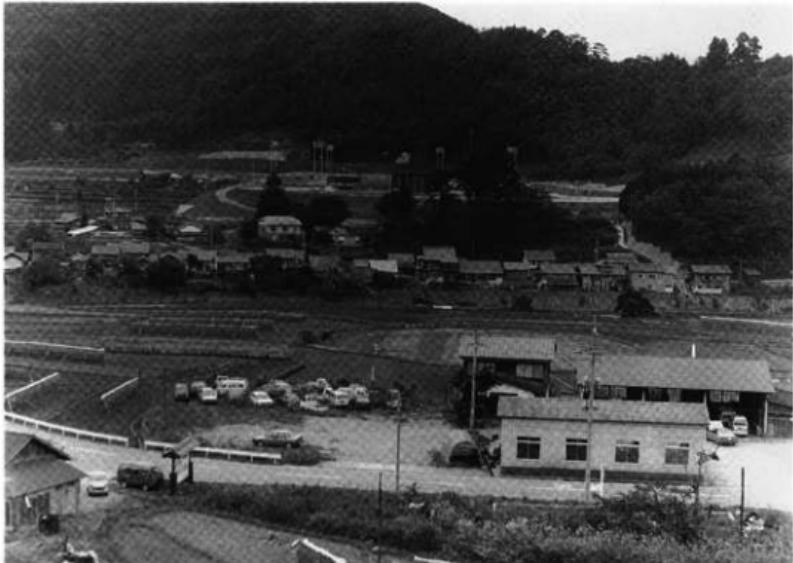


第26図 ヨレ地点遺物実測図(2)

また口縁部内面に貼付帶があり、上部に1条の沈線が施されている。8は前述の25-2と一個体を成すものであろう。

石器（第26図、図版14-2）1は、F区の4層に出土した半折の打製石斧。石質は流紋岩。2はF区4層に出土した打欠石鎌。

（渡辺 友千代）



1. 垣添地点遠景(北から)

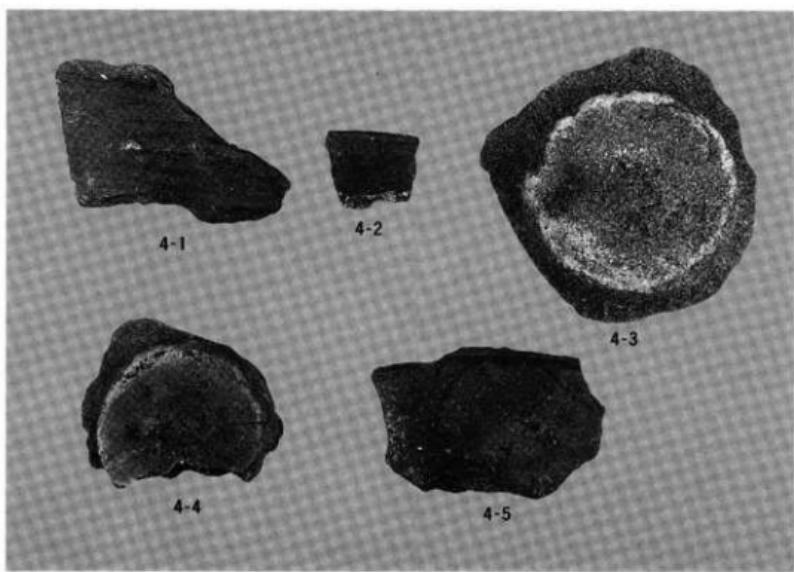


2. 垣添地点 B 区(北壁)

图版2



1. 垣添地点D区(北壁)



2. 垣添地点出土遗物

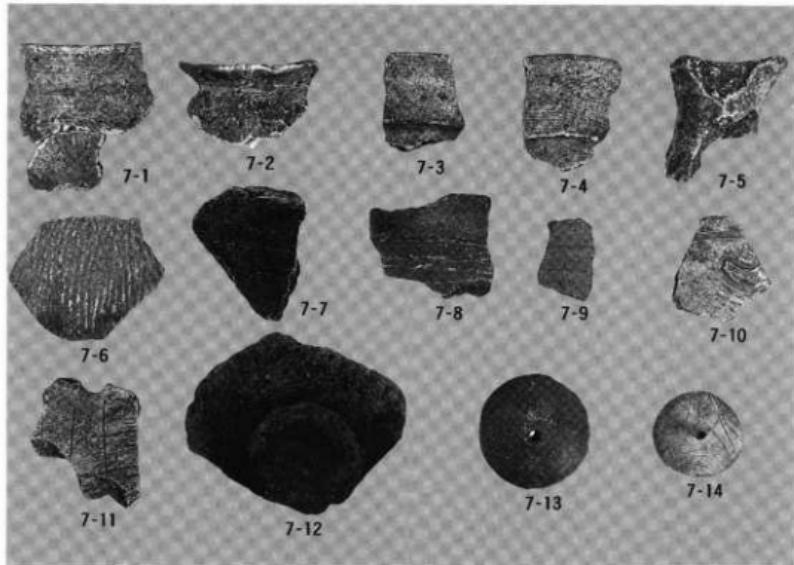


1. 太鼓胴地点 A 区(北壁)

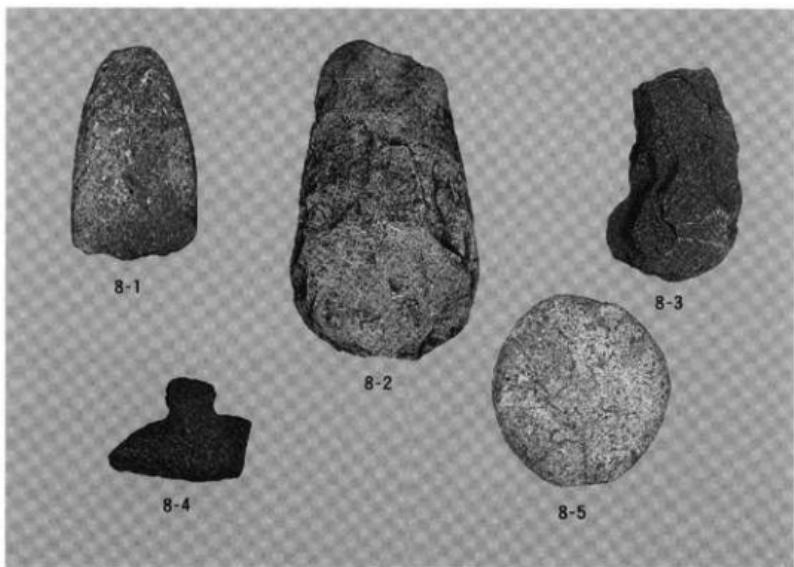


2. 太鼓胴地点 C 区(北壁)

图版 4



1. 太鼓洞地点出土遗物(1)



2. 太鼓洞地点出土遗物(2)

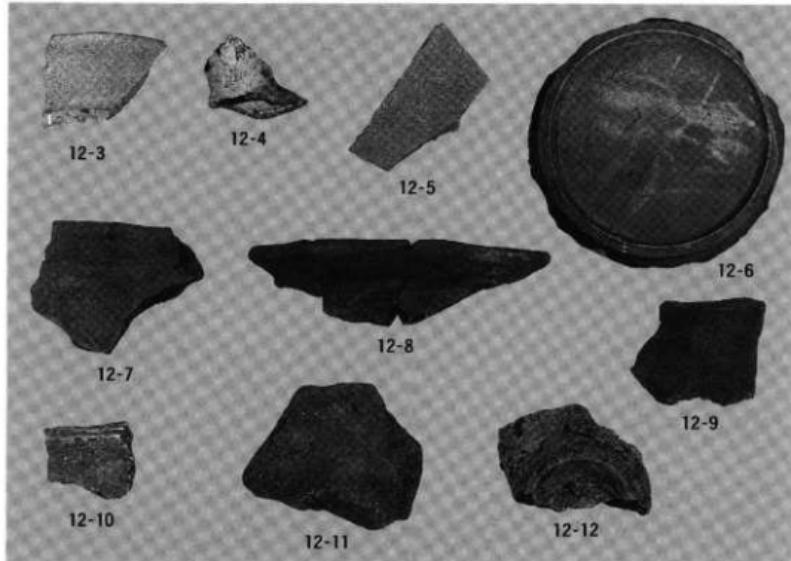


1. 筆田地点 B 区(東壁)

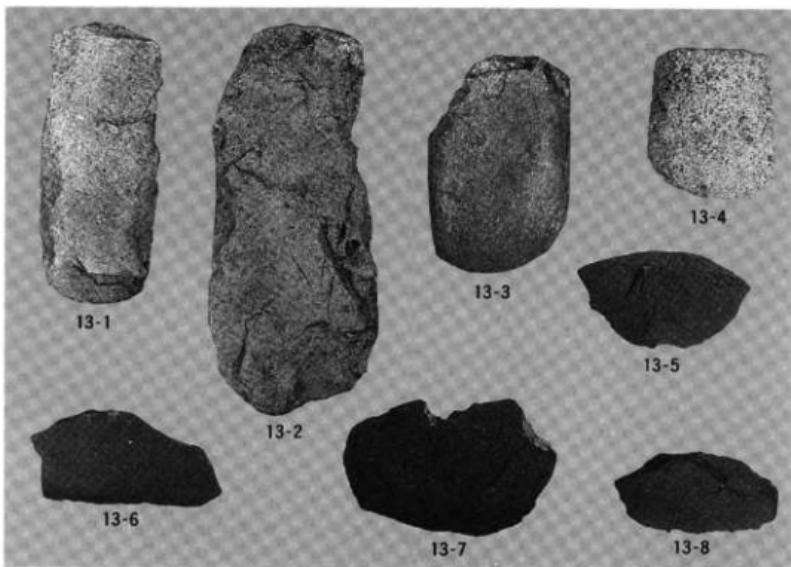


2. 筆田地点 D 区(北壁)

図版 6



1. 筆田地点出土遺物(1)



2. 筆田地点出土遺物(2)

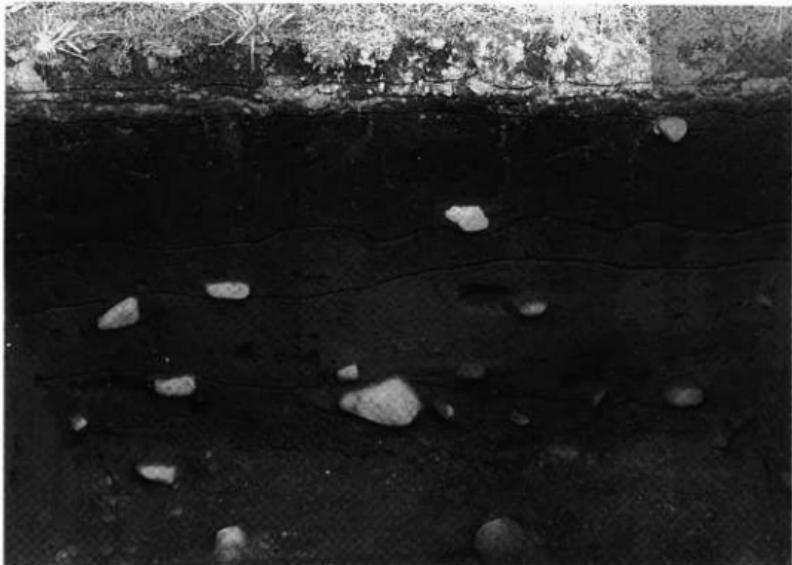


1. イセ地点 B 区(北壁)

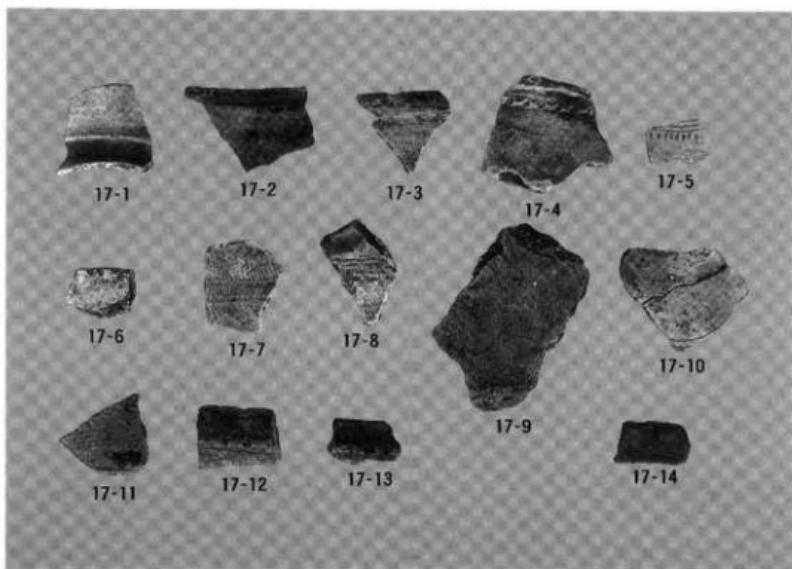


2. イセ地点 C 区(北壁)

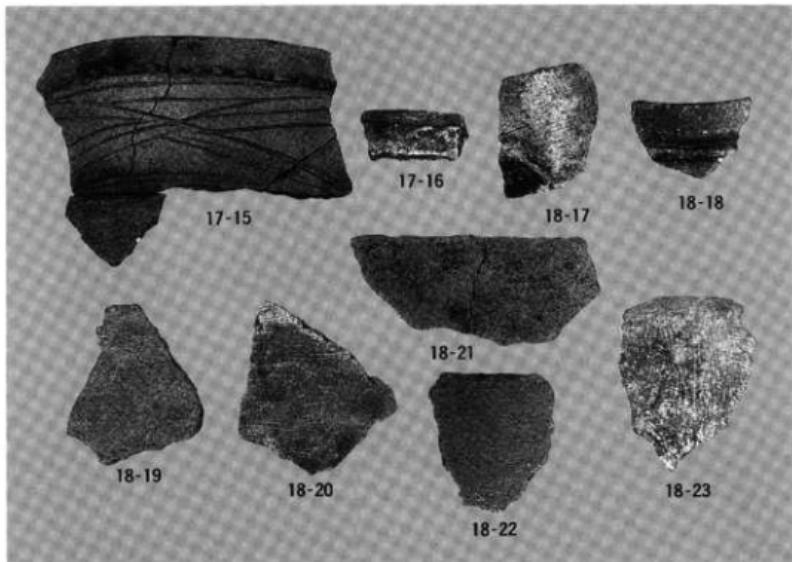
図版 8



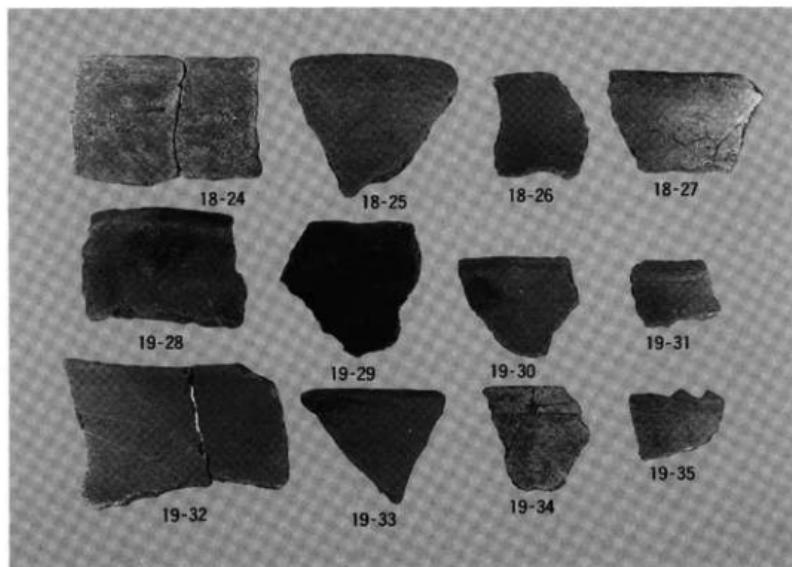
1. イセ地点D区(北壁)



2. イセ地点出土遺物(I)

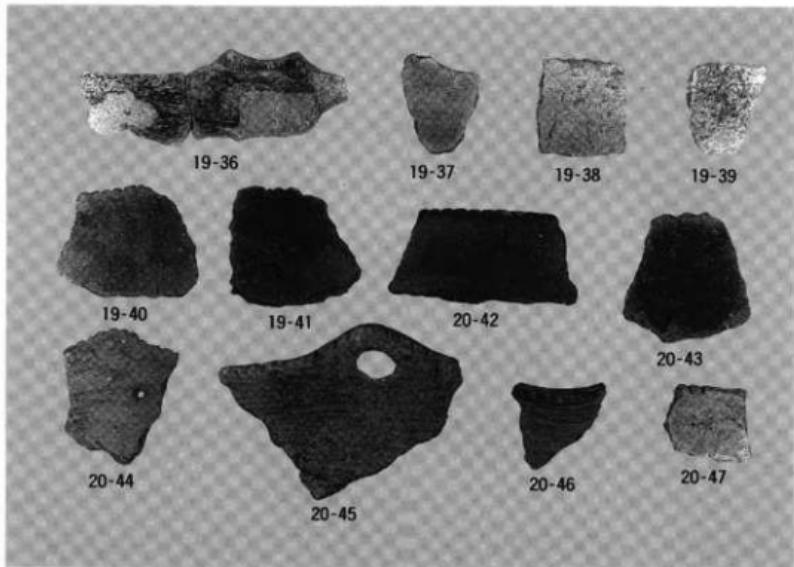


1. イセ地点出土遺物(2)

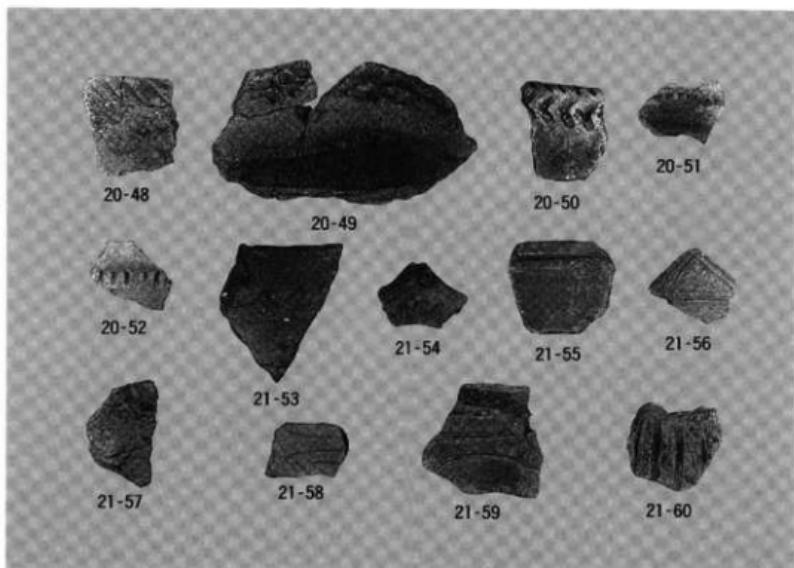


2. イセ地点出土遺物(3)

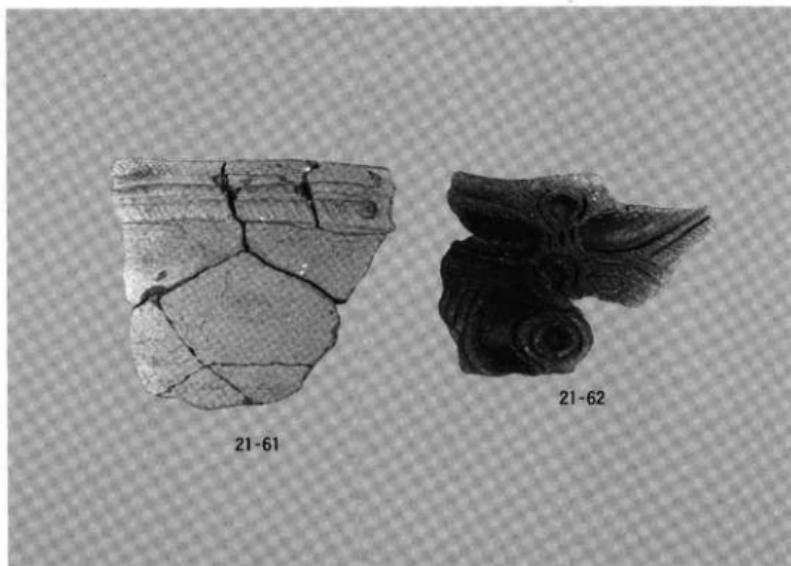
図版10



1. イセ地点出土遺物(4)



2. イセ地点出土遺物(5)

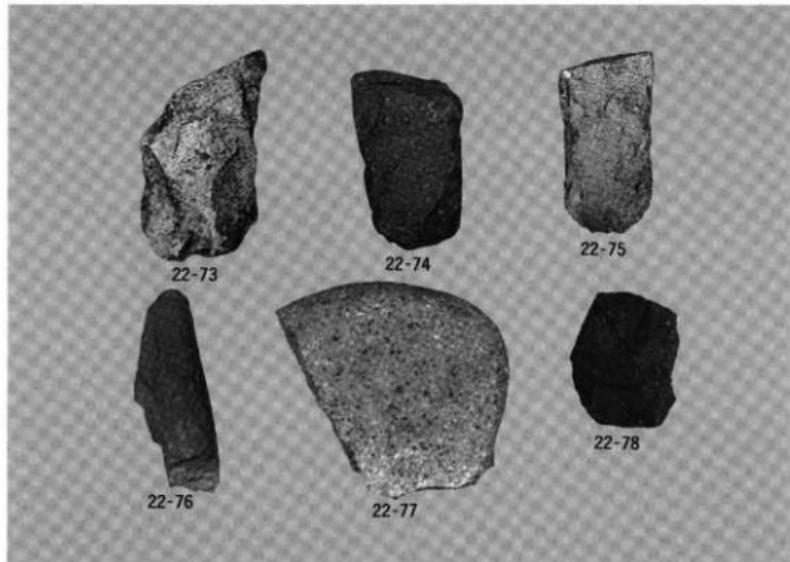


1. イセ地点出土遺物(6)

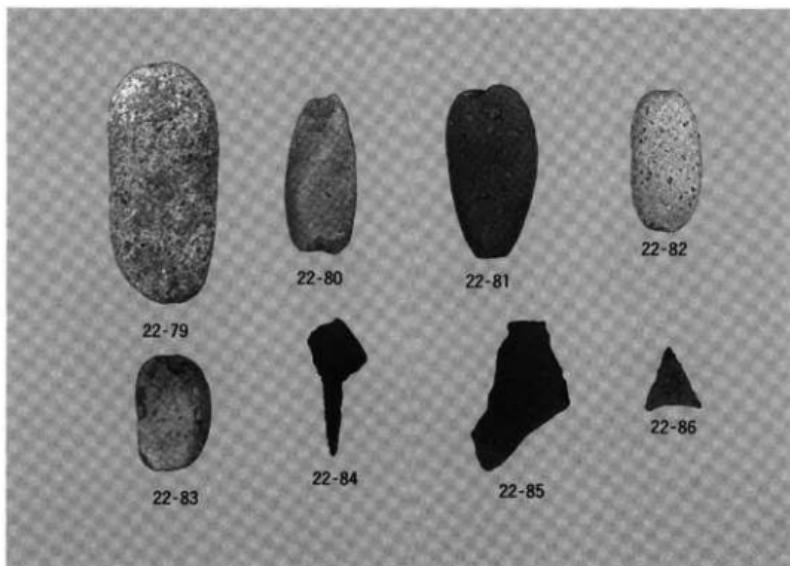


2. イセ地点出土遺物(7)

図版12



1. イセ地点出土遺物(8)



2. イセ地点出土遺物(9)

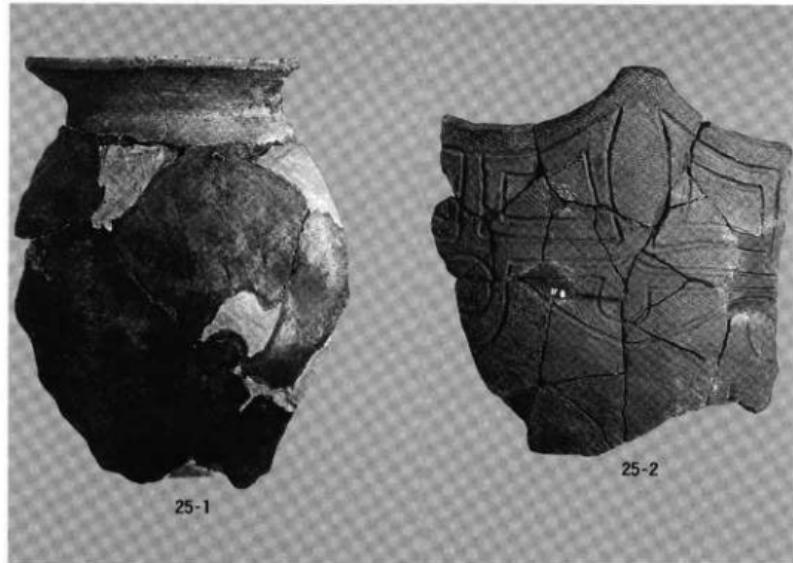


1. ヨレ地点B区(北壁)

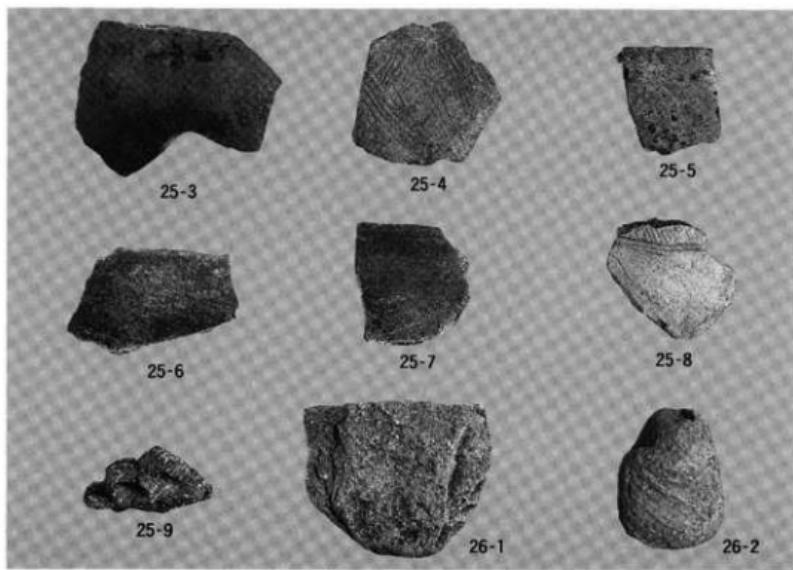


2. ヨレ地点F区(北壁)

図版14



1. ヨレ地点出土遺物(I)



2. ヨレ地点出土遺物(2)

平成3年3月10日 印刷
平成3年3月30日 発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町41260
印刷 有限会社 谷口印刷
島根県松江市母衣町89
